

幻の戦艦～大和型戦艦
五番艦[甲斐]推参！～

疾風改

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界中に深海棲艦が現れた、現代兵器では深海棲艦に傷を付けることが出来ず、人々は絶望していた。

そんな時現れた前大戦の船の魂を受け入れた艦娘達の奮闘で戦線の維持がなんとか出来た。

その中にたった一人男の艦娘……いや、艦息が産まれた、その艦の名前は――

この作品は艦隊これくしょんの二次創作です。

艦娘達のキャラ崩壊、オリジナル艦娘が登場します。

以上の事がよければお読み下さい。

無理、ダメ！という方は速やかにブラウザバックして、スピリタスの瓶を一気飲みして記憶を抹消して下さい。

目次

第一話	転校	1
第二話	我が名は戦艦甲斐	7
第三話	姉と俺と三人	16
第四話	戦闘開始——終了、ラバウル鎮守府へ	27
番外編	信濃、紀伊、甲斐の装備、キャラ、設定	35
第五話	姉妹と再開と取材……?	40
第六話	和やかな日常	51
第七話	歓迎会(1)	61
第七話	歓迎会(2)	71
第八話	朝の手合わせとお昼の釣り と……	83
第九話	何かを拾って家に帰ったら「元の場所に戻してきなさい」って言われるまでがテンプレ	95
第十話	旗艦拜命(強制)	104
第十一話	いぎ、演習へ	111
第十二話	撤退戦(1)	117
第十三話	撤退戦(2)	129
第十四話	シヨートランド泊地へ	138
第十五話	再会	146
閑話	ラバウル鎮守府の年越し&お正月	

第十六話 平和な一時

173 155

第十七話 何事もハプニングは男が悪い

180

第一話 転校

20XX年、侵略者は海から突然やってきた……。

侵略者は近くの島々を襲い始め、多くの人命を奪っていった。当然世界の国々も反撃をしたが、現代兵器のどんな攻撃も通用せず、各軍の被害が増えていくばかりだった。

その侵略者を「深海棲艦」と名付けたのは良いが中々コレといった策が出ず、そのせいで世界中の海域がほぼ占領され、航路が、空路が寸断され貧困が起きる国が続出していった。

世界中の人々が諦めかけた時、希望が産まれた……その希望の名は、「艦娘」……こう呼称された彼女等のおかげでなんとか一部の航路と空路を取り戻すことが出来た。だが、明らかに艦娘の数とソレを指示する提督（司令官）の数が少なく、未だ海の八割以上が深海棲艦に占拠されている。

その為海軍上層部は艦娘と提督の候補生を養育するための学校を作った。そもそも艦娘は元はただの人間で「気が付いたら艦娘になっていた」「戦い方も何故か分かる」と本人に聞いても曖昧になってしまっている。

しかし、そこは日本の技術を使い全国の学生の中から、一定の霊力（靈感とかそんな

感じ)を持つ人を艦娘や提督に振り分けている。

因みに一般人の霊力が50だとしたら、提督(男)の基準が80〜125、艦娘(女)は130〜180以上の霊力を持つ少女や女性(提督の場合は青年)を養成校に入学して貰い、検査や育成を行っている。

〜海軍上層育成兵学校資料より抜粋〜

俺は橘春夜、しがない一般人だった男だ。

だった……というのは高校1年で行われる霊力を調べる為の検査で基準を大きく上回る霊力量が確認され、同じく霊力量が基準を満たしていた二人の女子と海軍上層育成兵学校の校門前に立っていた。

「春夜も大変だね〜？男なのに艦娘側の方に行くなんて」

俺の肩に手を掛けて話し掛けて来たのは、北河優希(きたがわゆうき)という仲の良い……腐れ縁のある女子だ。

「うるせーよ、別に途中からでも提督の方に行けるんだ、気にしてねーよ」

「まあねえ〜まあ、沙耶香も一緒だし、ポツチにならなくてよかったね？」

「そうですか？春夜さんなら私達が居なくても大丈夫だと思えますけど」

優希に話しを振られて答えたのは、瑞原沙耶香(みずはらさやか)という大人しい女

の子だ。

「ま、知り合いが二人がいるから気が楽で良いさ」

他愛ない話をしていると、学校の方から薄黒のスーツを身に付けた女性……恐らく艦娘がやって来た。

「私は重巡洋艦的那智という、北河優希、瑞原沙耶香、橘春夜で間違い無いか？」

「「はい！」」

「うむ、良い返事だ。君達にはコレからここで寝起きして優秀な艦娘になれる用に努力してもらおう」

「「はい！」」

「では先に寮に案内する。着いてこい」

背を向けて歩き出した那智さんを見て、俺が覚悟を決めて校内に入ると、優希と沙耶香も一歩遅れながらも校内に入った。

「……後に戻れなくなつたね？」

「はい……ですが、後悔してません」

「やるからにはしつかりやらねえとな」

那智さんの後を追いながら、小声で言い合い、その後は黙って着いていった。

赤煉瓦造りの寮はかなり大きく四階建てで中も綺麗にしてあった。

寮内で俺は優希達と別れ那智さんに連れられ四階の端の部屋に案内された。

「ここが貴様の部屋だ。生憎相部屋では無いが、我慢してくれ」

「いえ、大丈夫です。逆に相部屋だったら気が緩まる時が無くしんどですからからかいの笑みを浮かべる那智さんに苦笑いを返し、部屋に入った。

「荷物がやけに少なかったが、良いのか？」

「ええ、コレがあれば、後は充電器と着替えだけで十分です」

「なるほどな……刀剣に詳しくは無いが、立派な代物だな」

「ありがとうございます。」

部屋に飾られている十文字槍と刀を見ながら荷物を片付けた。

「さて、そろそろ行くぞ。貴様を担当する教官を紹介する」

「那智教官では無いのですか？」

「てつきり那智さんが教官をしてくれると思っていたので、思わず聞き返していた。」

「私の担当は重巡以下の候補生だからな、貴様の担当では無いんだ。」

「そうですか、分かりました」

那智さんの答えに多少の疑問を感じながら部屋を出て、そのまま校舎まで向かった。

「……で少し待っていてくれ」

「分かりました」

一つの部屋の前で那智さんに言われたので待っていると、行き交う他の候補生である女子からちらちらと見られ、何やら内緒話のように小声で話しながら通っていった。

「……………居心地悪いなあ」

ポツリと愚痴をこぼしたら部屋が開き那智さんに呼ばれたので、部屋に入った。

「貴方が橘春夜君ね？」

部屋の中には来客用であろうソファとテーブル、そしてその奥に執務用の机と椅子がありその椅子に恐らく知らない人は居ない程有名な艦娘……………戦艦三笠が座していた。

戦艦三笠……………深海棲艦が現れてから一番最初に出て来た艦娘で数多の人を護り、数え切れない程の深海棲艦を屠ってきた艦娘である。

「はい、橘春夜です」

「それでは、三笠げん……………教官私はコレで失礼します。」

「ええ、ご苦勞様でした」

那智さんは俺の肩に手をポンと置いて「頑張れよ」と囁いて部屋から出て行った。

「中学から高校1年の途中までの成績は優秀、剣術や槍術をしていて運動神経も良く人柄も良好。そしてつい最近行われた適性検査で霊力量が400を超えていた為艦娘の候補生に志願……………貴方の能力なら提督でも行けたんじゃないかしら？」

「……書類仕事と人に指示を出すのが苦手ですので、それに深海棲艦と戦えるならその力が欲しかったので」

誰にもまだ言っていない偽りのない本音を伝えると三笠さんは嬉しそうに微笑んでいた。

「そう、貴方のその霊力量なら戦艦クラス……そしてその戦艦の中で最強級の大和型は確実だと思っわ」

「大和型戦艦……」

「ええ、一番艦の大和から始まり武蔵、信濃、紀伊、そして甲斐このうちのどれかだと思っわ」

「……………」

大和型戦艦……世界最大の四十六センチ三連装砲を三基積み大艦巨砲主義だった日本を象徴するような戦艦である。

「さて、改めて自己紹介するわね。もう知っているかも知れないけど、敷島型戦艦四番艦の三笠よ。貴方が入るクラスの教官をします。よろしくね」

「海軍上層育成兵学校に転入しました、橘春夜です。此方こそよろしくお願いします」

第二話 我が名は戦艦甲斐

兵学校に入ってから早くも六カ月が経った。

その間身体を鍛えたり深海棲艦の種別を覚えたり航行に必要なことを勉強した。個人的に女子だらけでギスギスしていた戦艦用クラス（予定）の皆と仲良くなれたことが一番の収穫だと思う。

そして、基礎過程が終了した次の日俺達のクラスは他のクラスの人達と共に広い講堂に集められた。

講堂には所狭しとカプセルのような機械が並んでいた。

その様子をジッと見ていたら、いきなり背中を誰かに叩かれた。

「いつてっ!?!」

「何ボーツとしてんのさ?」

「優希……このやろ」

背中を叩いてきたのは優希だったみたいで仕返しに優希の頭を掴んで少しずつ力を込めてやった。

「いや〜春夜が何やら落ち込んでるみたいだったから……つて痛い痛い痛い!?!」

「励ましてくれて嬉しいが、空気と雰囲気は読みやがれ」

「わ、分かった！分かったから、頭が割れる〜!」

「まったく……」

「えつと……お久しぶりですね、春夜さん」

手を離し、悶絶している優希を見ると、隣から声を掛けられ、そつちを向くと、沙耶香が優希を見て苦笑いを浮かべていた。

「おう、久しぶりだな、沙耶香」

「はい、大丈夫ですか？優希さん」

「うん……それより、今日は何で集められたんだろ？」

「さあな……あのカプセル？みたいなのが関係してるみたいだが」

「とりあえず教官達の話しを聞かないとですね」

沙耶香が壇上を見ていたから追うように見てみると、三笠教官や那智教官等の教官達が立っていた。

『候補生の皆さんおはようございます。今日皆さんに集まって貰ったのは艦娘になって頂くためです。』

三笠教官の言葉に講堂の候補生達はざわついていたが、直ぐに収まった。

『そして、艦娘になられた方はすぐさま各鎮守府に移送され、そこで習熟訓練を受けて

貰います。そして、最後に貴女方に伝えなければいけないことがあります。』

三笠教官が言うのと、バックスクリーンに映像が映し出され、そこには百二十六人という何かの人数が書いてあった。

「……………まさかな」

「わかるの？ 春夜」

「……………多分だがな」

『こちらに書いてあるのは、今まで亡くなった艦娘達の数です。』

やっぱりと小さく呟いてから横の二人を見るとそれぞれ驚いたような信じられなといった表情を浮かべモニターを見ていた。

『残酷な言い方になりますが、甘さは此処に置いて征きなさい、貴女方が向かうのは戦場です。甘さがあれば殺されてしまいます。ですが、優しさは忘れないで下さい、優しさを忘れたらそれはただの兵器となってしまう。彼方達はここにいる教官たちに鍛えられたのだから大丈夫と信じています……………私からは以上です』

教壇から三笠教官が離れると、代わりに那智教官が教壇に立った。

『では、次に私、那智から説明させて貰う———』

那智教官の説明を纏めると…………

一、カプセルの中に入ると作業が終わるまで出れない。

二、艦娘に成れば以前までの名を失う。

三、ほぼ全員が以前までの記憶を失い、艦娘の記憶を受け継ぐ。

四、これらが嫌な人は艦娘ではなく、提督としての道も選べる。
という事だ。

『今から十五分考える時間を与える。良く考えてくれ、考えが決まった者から向こうの更衣室で着替えて再びここに集まってくれ。以上だ、解散』

「……………記憶が無くなるのは、辛いですね」

優希、沙耶香と講堂をでると、沙耶香がポツリと言葉を溢した。

「そうだね、でも何人かは記憶が残るみたいなんだよ、ね？」

「ああ、だが本当に僅かだろうがな……………」

気が付くと三人で護岸に来ていた。

「沙耶香と春夜は如何する？」

「……………私は、艦娘になります。記憶が無くなるのは辛いですが、メリツトだけでは無いと分かっていますから」

「俺もだ。女になるかも知れねえが、やっぱり前でやり合う方が性に合ってるだろうからな」

「そっか、んじゃ私も覚悟決めますかね！」

俺達は笑い合つて再び講堂に戻つてカプセルに入るための服に着替えた。

講堂で待つてっていると、続々と候補生達がやって来たが、最初集まった人数からは少し少なくなつていた。

『時間だな……では、カプセルの中に入れてくれ、そして中にマスクがあるからソレを鼻と口を覆うようにしっかりと付けて待機していてくれ』

那智教官の言葉が終わるも皆まだ緊張しているのか、動かなかつたため、男としての意地を見せるため俺が最初にカプセルに向かつた。

「んじゃ、また会えたら会おうな」

二人に声を掛けてカプセルに入りマスクを付けると、蓋がゆっくり閉まつていった。

チラツと外を見ると候補生達が一人また一人と次々とカプセルに入つて行くのが見えた。

『カプセルに入つてもらう時間は人それぞれだ。直ぐに眠くなるだろう……それで、起きた時にまた会おう』

那智教官の言葉が聞こえて直ぐ呼吸をする度眠気がやって来た……足元に液体が当たる感触を感じながら、瞼を閉じた。

—————

「……んあ？……あれ？……ここは……？海？」

ふと目を開けると俺は大海原に立っていた。

『漸く来たか、我が依り代よ』

「っ!?!」

頭の中に直接声が響き辺りを見たが人は居なく、背後を振り返ってみると、かなり巨大な艦が佇んでいた。

「……戦艦?」

『左様、我が名は大和型戦艦五番艦甲斐、改大和型戦艦とも言うがな』

「アンタが俺がなる船か」

『うむ、そこに居ては話し辛らかろう、此方に来い』

戦艦甲斐がそう話すと甲板から階段が俺の足元まで伸びてきた。

階段を登りきり甲板に立つと、そこには黒っぽい藍色の袴を着て、白に藍色をあしらった着物を着た壮年の男性が居た。

『初めましてじやな、橘春夜よ。先程も名乗ったが、我は戦艦甲斐じや』

「海軍上層育成兵学校第五期生、橘春夜だ。それで?俺は何でここに居るんだ?」

甲斐は物憂いな表情を浮かべそつと口を開いた。

『我は戦艦としての使命を果たす事無く解体されのだ……一度も戦場に立つ事無くだ

……』

「……………」

『護ろうと決めていた護国を護れず、戦争に負けた……これが堪らず悔しいのだ……』
「……それを伝えたい為に呼んだのか？」

『それだけでは無い。我が最後の願いも伝えたいのだ』

「……果たせるか判らないが、聞かせて貰おう」

『感謝する。我が願いは一つ……我が力を使い、この国の……いや、この世に生きる全ての人を護ってやって欲しいのだ』

甲斐は俺の目をジツと見つめて来たので俺もすっかりと甲斐の目を見つめ返した。

「……出来る限りの力を使って、戦艦甲斐、貴方の願いを叶えて見せると約束する」

甲斐に向けて微笑んで答えると、甲斐も嬉しそうに微笑んでいた。

『橘春夜……主こそ我が力を使うに相応しい。いや、既にお主も戦艦甲斐か』

甲斐の言葉を不思議に思いふと目を下に向けてると、目の前にいる甲斐とまったく同じ服装になっていた。

『戦艦甲斐、我が依り代よ。この国を……人類の未来をよろしく頼む』

「ああ、貴方の名に相応しい働きをして見せよう」

『うむ、我が力はお主と共に、お主の未来は我と共にある。期待しているぞ』

甲斐の言葉が終わると辺りの景色がだんだんと白く染まっていき、あまりの眩しさに

目を閉じると再び意識が遠くなった。

~~~~~三笠Side~~~~~

『———それでは、起きた時にまた会おう』

那智の言葉が終わると候補生達が入った全てのカプセルに培養液が満ち光を放つていきました。

「始まりましたね……三笠教官」

「……ええ、私はこの子たちに恨まれるでしょうね」

自虐的な笑みを浮かべていると那智は「そんなことありません」と言ってくれました。

「少し皆を見てきます。貴女達は先に戻って下さい。」

教官をしてくれている子達に言つて私はカプセルを見て回りました。

「……まだ若いこの子たちを戦場に送るしか出来ないだけなんて、我ながら情けないですね……。あら、この子は……橘春夜君ですね……。時間は……八時間予想通り大和型ですね」

他のカプセルにも大和型だと思える子が三人居ました。

「貴方は誰になるんでしょうか？不躰ですが、楽しみにしておきますね……」

春夜君のカプセルから離れ私も講堂から出た。次にここに来るのは大体三十分位で

すね、と心の中で呟きながら……

~~~~~三笠 Side Out~~~~~

ふと目が覚めると身体を覆っていたと思う液体は無くなり、身体が前より軽くなった感じがした。

「よつと……」

カプセルの蓋を手で押すと、簡単に開いた。

横を見ると二人の女性……いや、姉も出て来た所だった。

背中には俺の最大の武器である試製五十口径五十一センチ三連装砲が四つありXのような形で背中にあり、俺の手には愛用していた槍とは別の朱色染めの十文字槍があった。

自分の武装を確認していると三笠教官が俺達三人の前にやって来た。

「貴女方の艦名を教えて頂戴」

「では、私から言わせて頂きます……大和型戦艦三番艦信濃と申します。よろしくお願ひ致しますね」

「次は私ね。大和型戦艦四番艦の紀伊よ、よろしくね」

「最後は俺だな。大和型戦艦五番艦甲斐だ、今度こそ護り抜いてみせる」

第三話 姉と俺と三人

「信濃、紀伊、甲斐、三人共艤装を解除して下さい。ああ、頭の中で念じれば艤装は消えますよ」

「了解（しました）（です）」

三笠教官の指示で艤装を解除しようと念じると、艤装が光の粒子になり俺達の身体に入ってしまった。

「それでは、三人の所属先を指示しm——」

「か〜い〜♪」

三笠教官の言葉を遮り、紀伊が俺に抱き付いてきた。

「こ、こら。紀伊、三笠教官の前ですよ！」

「紀伊、離れろ……」

「あらあら♪」

信濃姉が注意しているが紀伊は俺に抱き付いたままだったから、引き離そうと抵抗したが、紀伊の力も強く中々引き離せなかった。

「……………三笠教官、続きを」（↑諦めた）

「はあ、三笠教官お願いします」

信濃姉と二人で諦めて紀伊に抱き付かれたまま教官の話しを聞いた。

「では、改めて……三人にはラバウルにある鎮守府に行つて貰います。向こうは最前線になりますから、かなりの激戦が予想されます」

「南の護りを固めるために俺達を派遣するんですね。それで、何時向こうに行けば？」

「明日の一一〇〇（ひとひとまるまる）に輸送船三隻と彼方から来られている艦娘三人と共に行つて貰います。」

「信濃、了解しました」

「紀伊りようかい♪」

「甲斐、了解した」

「それでは、各寮に戻り用意をして下さい。以上」

三笠教官に敬礼をすると教官は微笑みながら講堂を去つて行つた。

「紀伊、そろそろ離れ……ろ！」

「あうっ」

教官が居なくなつたのを確認してから、力を入れて紀伊を無理矢理引き離した。

「まったく……信濃姉、久しぶり……になるのかな？」

「そうですね、大和姉様と武蔵姉様も既に居るみたいですから、お会いしたいですね」

「ねえ、甲斐？」

「なんだ？紀伊」

復活したのか、紀伊が信濃姉の横に立って話しかけてきた。

「なんで信濃姉さんには姉って付けるのに私は呼び捨てなの？」

「……なんとなくだ」

「こう見てると、甲斐がお兄さんで紀伊が妹に見えますね」

信濃姉の言葉に紀伊は反論するようにしていたが、聞き流しながら俺達も講堂を出て明日の用意に向かった。

部屋で用意をしていると、急に扉が開き、紀伊が入って来た。

「甲斐く遊びに来たよ〜♪」

「紀伊……せめてノック位しやがれ」

「……………」(コンコンツ)

部屋の内側から扉を叩いていた。

「遅えよ」

「まあまあ、姉弟なんだから良いじゃないの」

紀伊はそう言いながら俺のベッドに座った。

「はあ……」

紀伊の話しを適当に受け答えしながら荷物の用意を終わらした。

紀伊は話に満足したのか部屋に戻って行き、明日の事があるからもう寝ることにした。

~~~~~ラバウル鎮守府Side~~~~~

「提督？次期艦娘の申請は終わつたのですか？」

「そうよ、大和。戦艦が三人来てくれるのよ」

申請の承諾書がラバウル鎮守府の私、綾垣奏衣（あやがきかなえ）の元に届いた。

「あー、戦艦が私と武蔵の二人だけですからね、誰が来るんですか？」

「うーん、戦艦三人しか書いてなかつたのよね、迎えの娘達に横須賀に行つて貰つたらその時判るわよ」

大体は資料に誰が来るとか書いてあるはずなのだが、今回は書いてなかつた。

「そうですね、あ、迎えの娘は誰が行つたんですか？」

「ん？えつと……空母の天城に駆逐艦の磯風ちゃんと浜風ちゃんの三人に行つて貰つたわ。輸送船が三隻来る予定だから、臨時護衛部隊を作つて貰うように天城に伝えたいわ。」

「なるほど、それが妥当でしょうね。ここら辺は深海棲艦が偶に出没しますからね

……」

このラバウルの近くは深海棲艦と制海権の取り合いになっていて、危険性の低い航路でも戦闘に陥る場合が多々ある。

「まあ、天城が居るし大丈夫よ。磯風ちゃんと浜風ちゃんも練度は高いからね」

「そうですね、では提督、残りの執務も片付けましょうね？」

大和の手から机に置かれた資料はかなり多い……。

「うわぁーん！書類仕事なんて嫌いだー！」

私の叫びも軽く受け流され、夜遅くなるまで書類仕事をしていました。

~~~~~ラバウル鎮守府SideEnd~~~~~

次の日、俺は集合時間前に護岸に行き荷物を輸送船に積み、終わってから海をボーツと見ていた。

「何かありますか？」

背後から声をかけられて振り向くと、艦の時に度々俺が居るドッグ近くに来て話し相手になつてくれた浜風が立っていた。

「そうだな、慣れ親しんだ広い海があるぜ？久しぶりだな、浜風」

「はい、お久しぶりです。甲斐さん」

「そうだな……アイツ、磯風も居るのか？」

磯風も浜風と同じように俺の話し相手になってくれた一人だ。

「はい、私と一緒に来ています。甲斐さんは何処の所属に？」

「俺か？ラバウル鎮守府だ」

「本当ですか!?なら、今度は一緒にt——」

「浜風、ここに居たのか……そろそろ集合時間だ……ぞ……」

浜風の言葉を遮り磯風が現れ、俺を見て目を大きく開いていた。

「よう、磯風。久しぶりだな」

「……ああ、久しぶりだ。甲斐さん」

磯風が微笑みながら手を差し出してきたから答えるように磯風の手を握った。

「艦娘は女だけだと思っていたが、勘違いの様だったな」

「俺もそう思っていたよ。所で二人は何処の所属だ？浜風にさつき言ったが、俺はラ

バウル鎮守府所属になるが」

「私達はラバウル鎮守府だ。甲斐さんと他の二人を案内するために来たんだ。今度は

一緒に戦えるな」

「ああ、足を引つ張るかも知れないがよろしく頼むぞ。二人共」

「大丈夫です。私と磯風でしっかりサポートしますよ。ね、磯風？」

「ああ、この磯風に任せてくれ」

「頼もしいね、つと、そろそろ集合時間か行こうか？二人共」

「ああ」「はい」

二人は俺を挟むように並んで集合場所である。輸送船の側に向かった。

集合場所には既に航空母艦天城と姉二人が集まっていた。

「甲斐、遅いですよ？あら、貴女達は……」

「久しぶりです、信濃」

「久しぶりだな、信濃」

信濃姉と浜風達は軽く抱き合っていた。

「羨ましいと思った？」

「……………」

俺は無言で紀伊の頭を握りしめてやった。

「痛い痛い痛い痛い!!?お姉ちゃんに暴力振るったらダメー！つて本当に痛いよ!？」

「あ、あの……そろそろ良いかしら？もう出発しないと定刻にラバウルに着けませんから……」

「ああ、すまない。初めましてだな。俺は大和型戦艦五番艦甲斐だ」

「はい、雲龍型航空母艦、天城と申します。どうぞよろしくお願い致します」
天城さんは大人しめの緑の着物を着ていてよく似合っている。

「ああ、それより時間だったな。信濃姉！浜風、磯風！そろそろ行くぞー！」

「「ええ（ああ）（はい）」」

「あの、甲斐さん。そろそろ紀伊さんの頭を離してあげたほうが……」

「……………そう、ですね」

渋々紀伊の頭を離すと素早く天城さんの背後に隠れていた。

「ヴ……………」

隠れながら俺をチラッと見つつ威嚇？をしていた。

「えーつと……輸送船も出発し始めましたから、私達も行きましょう」

天城さんは艀装を展開し、棧橋から海上に飛び降りると、他の四人も続いて飛び降りて行った。

「……………」

ふと視線を感じ振り向くと三笠教官が校舎の屋上からこつちを見ていた。

「……………」

教官に頭を下げ、艀装を展開し勢いよく海上に躍り出て先を行く五人を追った。

—————

航海は順調で予定通りに進んでいた。

陣形は輸送船を挟むようにした複縦陣で右舷を天城さん、紀伊、浜風。左舷を信濃姉、俺、磯風の順番で向かっていた。

「順調ですね……」

「順調過ぎる気がするが……」

何か判らないがモヤモヤしたのが胸の中にあるのを感じていた。

「甲斐さんは心配性なのか？」

「そうじゃねえよ」

「心配は要らない。天城さんの直援隊は優秀だ」

「……そうかなら良いんだ——」

「偵察部隊より通信!! 『我 敵大艦隊ヲ視認。方位二一六—〇、距離九千二百。艦種ハ、軽空母又級二、戦艦夕級四、重巡り級五、軽巡へ級八、駆逐口級十、ヲ確認。又級ヨリ雷爆連合の発艦ヲ確認ス。艦隊ニマツスグ m——』 偵察機の通話が切れました……」

心配が的中してしまった様で敵の大部隊と会ってしまった。

「天城さん、貴女の航空隊の内訳を教えてください」

「は、はい。烈風が十五部隊（45機）、天山が七部隊（21機）、彩雲が三機いました」

が、先ほど墜とされ二機。以上六十八機です」

「……敵の総数はやく百八機……俺と信濃姉と紀伊のゼロカンと烈風を会わせると六十三機……直援に三部隊（9機）欲しいから……残り五十一機で行けるか？」

ブツブツ呟いていると磯風が横に来ていた。

「甲斐さん？どうかしたのか？」

「……いや、何でもない。天城さん、烈風隊全機発艦お願いします。姉さん達はゼロカン六機上げてくれ」

「分かりました」

「分かったよー」

天城さんと紀伊はすぐ頷いてくれたが、信濃姉は俺を見つめて来た。

「甲斐、考えがあるんですね？」

「まあね、危ない賭けだけど」

「分かりました、必ず成功させないね」

それだけ話すと、信濃姉はゼロカンを発艦し始め俺も発艦させた。

「甲斐さん、烈風隊全機上がりました。」

「分かりました。姉さん達は？」

「オツケーだよ」

「こちらは大丈夫よ」

航空隊の用意が終わり皆俺を見ていた。

「烈風隊はゼロカン隊と合わせて三部隊に分ける！一番隊は十部隊！二番隊は八部隊！三番隊は直援、烈風隊のみで三部隊！編成と航空指揮は天城さんお願いします。」

「承りました！」

航空隊の方を全て頼み次に俺達の艦隊に指示を出した。

「陣形変更！天城さんと輸送船を囲うように輸形陣を！先頭は信濃姉、次に浜風、天城さんと輸送船の後ろに磯風、右翼に紀伊、左翼に俺。」

「了解！！」

指示を全て出し終えて一気に冷静になってきた。

「すいません。天城さん、信濃姉……勝手に指示を出して……」

「いえ、恐らく今出来る最高の迎撃態勢だと思えます。」

「ええ、良い指示でしたよ」

「ありがとうございます。」

二人の言葉で安心しながらも、全ての火器に火を入れ何時でも撃てるようにしている。

「……………」（来るなら来い！もう誰も傷付けさせない！）

第四話 戦闘開s——終了、ラバウル鎮守府へ

戦闘態勢をとって暫くしたら、発艦させた制空隊が敵航空隊と会敵したと天城さんから教えて貰った。

「敵は倍近く居る……敵機の何機かは抜けてくるだろうな……」

呟きながら、全主砲に三式弾を装填して貰うように、要請さんに頼んだ。

「二番隊、敵航空隊と会敵！敵数四十八！全て雷爆連合です！」

「分かりました、全艦対空戦闘用意！」

俺の言葉に皆次々と戦闘態勢を整えていて、輸送船の方も機銃を用意して戦う気満々だった。

「敵雷爆連合三十機近く抜けてくる模様！」

「二番隊はどうしたの!?!」

「別働隊の敵戦闘機部隊から奇襲を受けたようですが、形勢は良いようです」

天城さんの報告に紀伊が叫んでいたが、その後の報告に安堵していた。

「航空有利って所かな……信濃姉、紀伊。敵機が距離四千を切ったら三式弾を斉射ね」

「点じゃなくて面で抑えるのね、分かったわ」

「分かったよー」

「甲斐さん、三番隊は如何しますか？」

「敵機が来る方向の艦隊距離三千五百、高度六千で待機、三式弾作動後突撃の指示を」

「分かりました。それでh——」

「ただし、艦隊距離二千を超えたら退避するように厳命して下さい」

失礼だったが、天城さんの言葉を遮って言うのと天城さんはニコニコ微笑んでいた。

「ふふふ……畏まりました」

対空電探を起動させると、馬鹿正直に一方面から敵機は向かって来た。

「零式自動信管調整、敵高度四千、敵速二百キロ、主砲仰角合わせ」

主砲を動かし、敵機が来る方向に向けた。

「敵距離四千を切った！主砲、一番から四番三式弾装填、撃てえっ!!」

「主砲、斉射始め!!」

「戦闘用意……撃てっ!!」

俺、信濃姉、紀伊から放たれた三式弾合計三十発が敵機向け飛び出した。

「天城さん、三番隊突撃用意」

三式弾の行方を見ながら天城さんに指示を出し、そして三式弾が炸裂した。

「今です！」

「三番隊突撃！艦隊距離二千を切ったら即時離脱！」

三式弾の炸裂でなんと敵機の四割が墜ちた。

そして、敵機が混乱している所に天城さんの烈風隊が突撃し残りを撃墜していた。

「戦闘終了、皆お疲れ様」

「私と浜風は何もしていないがな……」

磯風を宥めていると、出ていた艦載機が戻ってきた。

「……俺のゼロカンが二機墜とされたか」

未帰還機は俺のゼロカンを合わせて二十機もあった。

「甲斐さん、貴方のおかげで艦隊は助かりました。護送隊旗艦としてお礼を言います。

ありがとうございます」

「いや……結局未帰還機を許してしまったから」

「……それでもです。素直にお礼は受け取っておく物ですよ？」

天城さんは微笑み、少し背伸びをして何故か俺の頭を撫でていた。

「あの……流石に恥ずかしいんですけど」

「ふふふ♪」

手を払い除けるのも躊躇われたから、そのまま撫でられていた。

「天城さん、水上電探に反応がありました、行き先にさっきの敵大艦隊が居るようで

す。如何しますか？」

撫でられていると浜風がやってきた。報告しながら、撫でている俺をチラチラ見ているが……。

「私は砲撃戦が出来ないのですが……甲斐さん、何か案はありますか？」
撫でるのを辞め真面目な感じで天城さんは聞いてきた。

「……そうですね、輸送船の護衛に浜風、磯風と天城さん、敵大艦隊に天城さんの天山隊と烈風隊四部隊（12機）を向かわせつつ俺達戦艦組が突撃、殲滅する。これでどうでしょうか？」

「意見具申よろしいでしょうか？」
発案したら浜風から意見が入った。

「なんだ？」

「輸送船の護衛ですが、私か磯風のどちらかで十分かと思えます」

「そうですね……では、突撃班は私、信濃と紀伊、甲斐、浜風の四人。天城さんと磯風は輸送船の護衛をお願いします」

「分かりました」

「私も敵艦とやり合いたかったが、護衛も大事だからな……了解した」

天城さん達に護衛を任せ、俺達は敵艦隊に向かって走った。その上を天山隊と烈風隊

が悠々と飛んで、俺達を案内してくれた。

敵艦隊との距離が一万を切り、弾着観をして貰うためにゼロカンを発艦させ、主砲の用意をした。

「主砲、一番から四番徹甲弾装填、撃ち方用意」

「烈風隊から通信、『天山隊ノ攻撃にヨリ敵戦艦夕級一轟沈、重巡り級三轟沈、軽巡へ級二轟沈、駆逐口級三轟沈ス。敵戦艦へノ被害甚大ナリ』以上です」

「分かった、ならば次に先制砲撃を喰らわせる」

目を閉じゼロカンからの報告を頼りに諸元入力をした。

「距離八千五百、敵速十七ノット、主砲一番、二番射軸合わせ、目標戦艦夕級、用意……撃てえっ!!」

俺の主砲から九一式徹甲弾が真っ直ぐ敵艦隊に向かって飛んでいった。

「着弾まで、三、二、一、今!」

遠くの方で僅かにだが水柱が立ったのが見えたが、どうやら外したようだ。

「主砲三番、四番、射軸修正、用意……撃てえっ!!」

再び主砲から砲弾が放たれ、真っ直ぐ敵艦に向かっていった。

弾着まで後十秒の所で信濃姉と紀伊が主砲を斉射していた。

四十六センチ砲の音はやはり腹の奥まで響くいい音だ。

俺が放った砲弾も敵艦に届き結構離れているのにも関わらず、かなりの轟音で戦艦タ級が沈んでいくのを確認した。

「敵戦艦の撃沈を確認！これより突撃する！信濃姉と紀伊は援護、浜風は俺に付いてこい！！」

「え、!?わ、分かりましたあ！」

手元に十文字槍を出してそれを握り締め最大船速（30ノット）で正面から堂々と敵艦隊に突撃していった。

「各砲塔自由射撃！こつちを狙う暇を与えるな！！」

俺に付いている全八つの主砲と副砲はそれぞれ敵艦に狙いを定めて撃っていた。

時折こつちに向かつてくる砲弾があるが、浜風に向かうのも含め全て槍で叩き落とすてやった。

姉さん達の援護も効果的で敵は混乱しているように見えた。

「余所見は……厳禁だぜ！！」

丁度撃たれた味方を見た重巡り級を槍で突き刺して倒した。

「大和型戦艦五番艦甲斐！推参！敵を、殲滅する！！」

「駆逐艦浜風、突撃します！！」

俺は主砲の撃ち方を止め、副砲と高角砲で敵を撃ち、十文字槍で刺したり斬ったりした。浜風は俺の邪魔にならないように動いてくれているのか少し離れたところから、俺を死角から襲ってくる敵を撃ち、直ぐさま魚雷を放って確実に沈めていた。

近くに居た軽巡へ級の喉を穂先で突き刺し、副砲で止めを確実に刺してから周りを見ると、敵は全て沈んでいつている最中で、動いているのは俺と荒い呼吸で付いてきている浜風だけだった。

「お疲れさん、浜風」

「はあ……はあ……お、お役に、んつ、立てて何より……です……」

浜風の頭を優しく撫でて労っていると、姉さん達がやって来ていきなり怒られた。

「敵中に飛び込むなら先に言っておきなさい!! 思わず撃つてしまうところだったんですよ!？」

「そうそう、浜風ちゃんも居るんだからもう少し考えて行動してよね? 万が一浜風ちゃんに当たったら如何するつもりだったの?」

「………すいませんでした、何も考えていませんでした」

「次はありませんよ?」

「はい……」

姉さん達に怒られ終わり、後からやって来た天城さん、磯風、輸送船と合流して、ラ

バウル鎮守府に向かった。

俺は罰として疲労困憊になった浜風を背負っている。

南の方の海に来たからか、照り返しと太陽光が強くなった気がした。

「あ、甲斐さん出迎えのラバウル艦隊です」

なんとか復活した浜風を下ろし、しばらく進んだら、視認できる距離に艦隊……ラバウル艦隊が見えた。

「此方、ラバウル鎮守府所属、第四護衛艦隊旗艦天城です。横須賀より新たな仲間を三名お連れ致しました」

『此方、ラバウル鎮守府所属第一艦隊旗艦武蔵だ。天城、護衛任務ご苦労だった。そして横須賀から来られた艦娘三人を我々は歓迎する』

誰が応答するのか姉二人を見ると、にこやかに俺に任せると言ってきた。

「出迎え有難うございます。俺は、ラバウル鎮守府に新規着任する、大和型戦艦五番艦甲斐です。信濃、紀伊共々よろしくお願いします。武蔵姉」

番外編 信濃、紀伊、甲斐の装備、キャラ、設定

大和型三番艦 信濃 イメージCV伊藤静

身長 175cm

体重 (黒く塗り潰されている)

スリーサイズ B:86 W:58 H:90

装備

主砲 四十五口径 四十六センチ三連装砲 三基

副砲 六十口径 十五・五センチ三連装砲 四基

高角砲 四十口径 十二・七センチ連装高角砲 六基

機銃 二十五ミリ三連装機銃 十基

二十五ミリ連装機銃 四基

搭載機 零式水上観測機 七機

カタパルト 二基

二十二号対水上電探

二十一号対空電探

キャラ設定

姉弟の紀伊、甲斐と共に改造された元人間で、人だったときの記憶は朧気だが覚えて
いる。

姉弟のことが大好きでお節介焼き。真面目な性格は大和に似た。

何時もは優しいが、姉弟が危険なことや危ない真似をすると怒る、怒るとかなり怖い。

大和型四番艦（改大和型一番艦） 紀伊 イメージCV 伊藤かな恵

身長 180 cm

体重（破られた痕跡がある）

スリーサイズ B：89 W：61 H：92

装備

主砲 五十口径 四十六センチ三連装砲 三基

副砲 六十口径 十五・五センチ三連装砲 四基

高角砲 四十五口径 十二・七センチ連装高角砲 八基

機銃 二十五ミリ三連装機銃 十三基

二十五ミリ連装機銃 十基

十三ミリ単装機銃 六基

搭載機 零式水上観測機 八機

カタパルト 二基

二十二号対水上電探

二十一号対空電探

キャラ設定

姉の信濃、弟の甲斐と共に改造された元人間。人だったときの記憶は残っていない。天真爛漫な明るい性格。何時も一言余計なことを言い、甲斐に制裁（アイアンクロー）を喰らっているが、改善の余地はない模様。

信濃に比べれば適当な感じに見られるが、戦闘中は常に回りに気を配りサポートに回ることが多い。（本人曰く「自分で考えるより指示される方が良い」との事）
可愛い物好きで誰彼構わず抱き付く癖がある。

大和型戦艦五番艦（超大和型戦艦一番艦） 甲斐 イメージCV 島崎信長

身長 190 cm

体重 七八 kg

スリーサイズ（黒く煤けて読めない）

装備

主砲 試製五十口径 五十一センチ三連装砲 四基

副砲 試製五十口径 二十・三センチ三連装砲 四基

高角砲 五十口径 十センチ連装高角砲 六基

機銃 二十五ミリ三連装機銃 十六基

二十五ミリ連装機銃 十基以上

十二・七ミリ単装機銃 十基以上

搭載機 零式水上観測機 八機

カタパルト 二機

二十二号対空電探 二基

二十一号対空電探 二基

今作の主人公。

信濃、紀伊と共に改造された元人間。人だったときの記憶ははつきり残っている。

仲間が傷付くことを極端に嫌い、しばしば無茶な突撃を繰り返し、姉達に怒られている。

何故か異様に駆逐艦娘に懐かれる。

槍を扱うのが得意で偶に軽巡洋艦の龍田（登場予定）と模擬戦を繰り返している。

性格は優しく困ってる人を見逃せないテンプレ野郎。

第五話 姉妹と再開と取材……？

~~~~~武蔵Side~~~~~

「甲斐？それに信濃と紀伊だと？……ふふふ、そういう事か……歓迎するぞ。信濃、紀伊、甲斐ようこそソラバウル鎮守府へ」

まさか此方に来る艦娘が私達の姉弟とは思ってもいなかったな。

「ふふふ……楽しくなりそうだな」

「何が楽しみですか？」

「おっと、声に出していたか？」

「はい！バツチリ聞きましたよ!!」

心の中だけで話していたと思つたら、隣に居た青葉に聞かれていたとは思わなかったな。

「私と大和の妹達が来るんだ。楽しみに思うのも仕方ないだろう？」

「なるほど！では到着したら早速取材を受けてもらいましょう!!」

「………余り強引にはしてやらないでくれよ？」

「ええ、分かっていますとも！」

口では自制しているように見えたが、顔は今にでも突撃していきたいと思わせるような感じで、心の中で妹と弟に謝罪をした。

~~~~~武蔵SideEnd~~~~~

「……………?!……………?!」

武蔵姉と無線を交わし終えて少ししたら何故か背筋がゾクツと震えた。

「甲斐さん? どうかしめましたか?」

「いや……………何でもない」

周囲に敵が居るのかと思いい電探を起動させたが気のせいだった見たいだ。

「そうですね? あ、武蔵さん達が見えてきましたよ」

浜風が指をさす方を見ると、武蔵姉が微笑みながら主砲を一基動かしていた。

「(礼砲か?) 一番主砲空砲込め」

妖精さんに指示をしたら一番主砲に重さを感じゆっくり最大仰角で方を上に向けた。

「甲斐? 何をしてるんですか?」

「ん……………ちよつと武蔵姉に挨拶をね」

信濃姉は「なるほど」と微笑みながら納得していた。

ふと、武蔵姉を見ると、一番砲を上に向け腹に響く轟音を立てて空砲を撃っていた。

「礼砲に応じます、第一主砲一番砲用意……………撃てえ!!」

武蔵姉よりも大きな爆音を立て空砲を撃つてから皆を見ると、磯風を除く全員が耳を塞いでいた。

「……大丈夫か？」

「やはり、耳を塞いでも凄い音ですね」

「うむ、心地良い音だ。やはり五十一糎砲は伊達ではないな!!」

磯風は何故か恍惚の表情を浮かべていた。

そして、武蔵姉との礼砲のやり取りを終わらせてラバウル出迎え艦隊と合流した。

「護送艦隊天城以下、磯風、浜風の三名帰投しました」

「ご苦労だった。そして……」

俺達は信濃姉を先頭にしてその後ろに紀伊と並んで敬礼をした。

「新造艦艇、信濃以下二名、ラバウル鎮守府に着任致しました。」

「先程も話したが、歓迎するぞ。信濃、紀伊、甲斐……ようこそラバウル鎮守府に！」

「武蔵お姉ちゃん!!」

我慢できないと言わんばかりに、紀伊は武蔵姉の胸に飛び込むように抱き付いていた。

「おつと……全く、甘えん坊になったものだな？」

武蔵姉は優しく微笑みながら、紀伊の頭を撫でていた。

「お久しぶりです、武蔵姉様。」

「そうだな。随分綺麗になっっているじゃないか？」

「あ、有難う御座います…／＼／＼」

「ふふふ、そして……」

信濃姉を弄つて満足したのか微笑んだまま俺を見ていた。

「久しぶり…かな？」

「そうだな。まさか弟が増えていたとは思わなかったがな？」

ニヤニヤした表情をしているからからかわれていると分かった。

「……俺もからかい好きの姉が居るとは思わなかったよ」

せめてもの抵抗で毒づいてやると、武蔵姉は楽しそうに笑っていた。

「ふふふ……言うではないか？ 甲斐よ」

「せめてもの抵抗だよ」

「全く、生意気な弟だな……つと、そろそろ離れる紀伊」

「は～い」

「さて…天城、磯風達と輸送船の荷物をドッグに運んでくれ。三人は私に付いてきてくれ。」

「『『『『了解』』』』」

「青葉達は天城の手伝いをしてやってくれ」

「え？取材h——」

「……………」(↑鋭い目つき)

「分かりました……………」

武蔵姉は青葉を一瞬で深海棲艦も殺せるような鋭い目で睨んだだけで黙らせていた。

「如何した甲斐？何か言いたげだが？」

「……………いや……………何でもねえよ」

「そうか？ならば付いてこい」

俺達着任組は武蔵姉に着いていった。

……………途中までは。

……………綾垣奏衣Side……………

午前中のお仕事を終わらせて、今日秘書艦をしてくれている大和と武蔵が作ってくれたカステラでお茶をしていたら、執務室の扉をノックする音がしたので、大和にでもらった。

「あ、今日は確か新規着任の娘が来るんだった……」
しかも迎えに出ているのは武蔵でこんな事をしていっているのがバレたら確実に怒られるわね……。

急いで私は来客用のテーブルから執務机に戻った。

「提督よ新たな戦力が三隻着任した……ぞ」

テーブルの上を見た武蔵の目つきが変わり私を真っ直ぐ射貫いた。

「提督、後で説教だからな」

「……あ、う……はい……」

武蔵は腕を組みながら二人の艦娘を連れて私の前にたつた……二人？

「ねえ、武蔵」

「なんだ？説教はまけないぞ。」

「そうじゃなくて、二人しか居ないわよ？」

「なに？」

武蔵は振り返ると強く手を握っていた。

「紀伊、甲斐は何処に行った？」

「え、えーと……青葉ちゃんがいきなり曲がり角から現れて、甲斐の手を掴んで走って

行った……よっ……」

「そうか……大和、二人を頼むぞ？」

「え、ええ」

大和は武蔵の威圧に少し震えながら頷いていた、私も怖いから気持ちは分かるよ！

「提督、少し席を離れるぞ」

「う、うん。行つてらっしゃい」

武蔵は早歩きで部屋を出て行つた。

『青葉の馬鹿は何処に行つたあああああ!!!』

鎮守府中に聞こえるんじゃないかと思えるくらい大きな声を出して走つて聞くのが目に浮かんだ。

「……………（青葉、超逃げて……!）」

青葉の無事を祈りながら置いてけぼりにされている二人に目を向けた。

「えっと、初めまして。私はこの鎮守府で提督をしています。綾垣奏衣と言います。よろしくね？」

「あ、初めまして。大和型戦艦三番艦の信濃と申します。今度こそ最後まで護ります」

「同じく大和型戦艦四番艦の紀伊だよ。私が来たからもう大丈夫だよ！」

「大和の姉妹なのね、良かったわね大和」

「はい！」

「それじゃあ、武蔵がもう一人の娘を連れてくるまでお茶をしましょうか」

親睦を深めるために二人を誘って四人でお茶とカステラを楽しんだ。

~~~~~綾垣奏衣 Side End~~~~~

武蔵姉について行ってたと思つたら、俺は何時の間にか食堂で駆逐艦娘に囲まれていて、目の前には青葉が居た。

「……なんでこうなつたんだ？」

「どうしましたか？ 甲斐さん」

何故か俺の膝に座っている雪風の頭を撫でて「何でもない」と答えておいた。序でに、俺が座っている椅子の右には時津風、左には天津風が居て俺の服をしっかりと握り俺にピッタリくっつくように座っていた。

「それよりも、お久しぶりですねぇ、甲斐さん。」

「ああ、最後は呉だったか……お互いに」

青葉は大破して座礁しながらも浮き砲台として呉を護ってくれていてその時に良く話をしていた。

「では早速取材——『青葉の馬鹿は何処に行ったあああああ!!!』をさせて頂きますね」

「そのままスルーしただど!？」

武蔵姉の怒りの叫びをも気にしていないよう……あ、額に冷や汗かいてる。

「む、武蔵さんが来るまでに取材をしたいんで……ご協力下さい……」（震え声）

「わ、分かった」

青葉の質問は簡単でそこまで深いのは無かった。

「では最後n——」

「見付けたぞ……青葉あ」

「ご、ご協力有難う御座いましたああああ!!!」

青葉は凄まじい速度で窓から飛び出して逃げた。

「青葉ああああ!!!逃がさんぞ!!!」

武蔵姉も同じように窓から飛び出し逃げる青葉を追いかけていった。

「お二人とも早いですね!」

「ああ、そうだな……」

雪風を撫でて現実逃避をしていたら、鳳翔さんがお茶とお饅頭を持ってきてくれた。

「有難う御座います」

「いえいえ、賑やかな所ですから。直ぐ慣れますよ」

「そうですね」

鳳翔さんも昔話したことがある人でよく世話を焼いて貰っていた。

「それより、提督にはご挨拶しましたか？」

「しようと思つたら青葉に連れてこられました。」

「あらあら、なら私が執務室まで案内しますね」

「有難う御座います」

手早く饅頭とお茶を腹に入れて、眠っている二人を雪風に任せて鳳翔さんに付いて執務室に向かった。

「提督、失礼致します」

扉をノックして部屋に入ると、紅茶の香りと、バターの甘い香りが漂っていた。

「あら、いらつしやい鳳翔さん……其方の男の人は？」

「どうやらこの人は俺が艦息とは気が付いていないようだったから、佇まいを整えて敬礼した。」

「此方の鎮守府に新規着任した、大和型戦艦五番艦甲斐だ。今度こそ皆を護り抜く」

俺が挨拶すると提督は明らかに驚いた表情をしていた。

「え？男性？あれ？でも艦娘って…あれ？」

「提督、挨拶が……」

鳳翔さんの言葉で提督は落ち着いたようだった。

「この鎮守府の提督をしています。綾垣奏衣です……本当に男の人？」  
「……証拠、見せましょうか？」

袴を抑えてる紐に手をかけながら言う。提督は顔を真っ赤にして固まり姉たちも固まっていた。

「うえ……／＼／＼!?」

「冗談ですY——」(バシッ！)

いきなり背後から頭をそれなりの強さで殴られ頭を押さえながら振り向くと、ポロポロになった青葉を担いだ武蔵姉が居た。

「甲斐、提督は純情なんだからそういうからかい方をするな」

「りようかい……所で……青葉生きてる？」

「少しお灸を据えただけだ。直ぐに生き返る」

「……そうか。えっと、提督、さっきはからかってゴメンね？」

「え!?だ、大丈夫気にしてないから!？」

取り敢えず仲直り? 出来てその後姉さん達のお茶会に鳳翔さんと一緒に混ざってお茶を貰った。

因みに青葉は、武蔵姉が言ったとおりすぐ目覚めて俺達と一緒にお茶をした。



## 第六話 和やかな日常

提督から今日と明日はゆっくりするように言われ、青葉から寮に案内して貰うように言われ、いざ行こうとしたら大和姉がふと思いついたかのように呟いた。

「甲斐って男の子だけ……お風呂ってどうするの？後、お部屋も……」  
「……あ、そうだった」

「提督よ、大和が言わなかったら誰かと一緒の部屋にしていたら？」

「はい……あ、謝るからアイアンクローは止めて」

武蔵姉の手から逃げるようにして俺の背中に回った。

「だが、ホントに部屋と風呂。俺はどうしたら良いんだ？」

俺の質問に困ったように眉をひそめていた、可愛い。

「えっと、取り敢えず……武蔵、手の空いてる子に寮の角の部屋を片付けさせるように指示して！」

「仕方ないな……」

武蔵姉は溜息をつきながら部屋を出て行った。

信濃姉と紀伊は先に青葉に連れられて部屋に向かって行っていった。

「……俺は何をしていたら良い？」

やる事が無いのは暇なので聞いてみると、「特にないかな？」と言われて、暇決定した。

「では提督、私は御夕飯の用意をしに行きますね。」

「うん、よろしくね、鳳翔さん♪」

「ふふふ、はい」

提督のウインクに鳳翔さんは微笑んでいた。

「ああ、そうだ。鳳翔さん付いて行って良い？」

「ええ、構いませんよ。駆逐艦娘の子が居たら遊びに付き合ってあげて下さいね？」

「了解です」

鳳翔さんに続いて提督室を出た。

鳳翔さんに先に食堂に入って貰おうと扉を開け

「甲斐さーん!!」

「グボア!!」

扉を開けた瞬間内臓を突き上げて来る衝撃が腹を襲ってきて、背後に吹き飛ばされそのまま仰向けに倒れた。

「甲斐さん!?それと……雪風ちゃん?」

鳳翔さんの声が聞こえたが、今は激痛を耐えるのに精一杯だった。

「甲斐さんやつと帰ってきました!」

聞き覚えのある声で涙で潤む目で腹に衝撃を与えてきた犯人を見ると、キラキラした瞳で俺を見ている雪風が居た。

「……雪風?」

「はいっ!」

「突撃するのは、危ないからもうしたら駄目だからな?」

「そうなんですか?」

「うん、約束できるな?」

「はいっ!」

元気な声で返事をした雪風の頭を優しく撫でながら倒れていた身体を起こすと、鳳翔さんが慌てるようにやって来た。

「甲斐さん大丈夫ですか?」

「一応……戦艦なんで」

額に脂汗を滲ませながらも微笑むと、鳳翔さんはほっとした表情になっていた。

「さて、雪風」

「はい、何でしょうか？」

「せっかくだから、鎮守府を案内してくれるか？」

「はいっ！あ、天津風ちゃんと時津風ちゃんも誘っても良いですか？」

「良いぞ。人数は多い方が楽しいからな」

「はいっ！分かりました」

雪風は走って食堂に戻っていった。

「あの子達のことお願ひしますね」

鳳翔さんが微笑みながらまだ座っている俺に手を差し出してきて、その手を取って

立ち上がった

「分かっていますよ」

お尻に付いた砂を払っていると、雪風が天津風と時津風を連れてやって来た。

「良いのかしら？ 私たちも着いていつて？」

「ああ、問題ないさ」

「じゃあ、早速行こー」

「行きましようー」

雪風と時津風に手を掴まれて鎮守府案内に向かった。

「あ！待ちなさいよ！」

先に歩き出した俺達を追うように天津風が追ってきて俺の着物の裾を控え目に摘まんでいた。可愛い（可愛い）。

雪風の案内で最初は工廠にやって来た。

「着きました！」

「此処が工廠ですよ！」

「明石さんと夕張さんがほぼ担当しているのよ」

雪風、時津風、天津風の順番に説明をしていくと、工廠に入る扉が開き、中から桃色の髪と緑色の髪の女性が出て来た。

………つなぎの袖を腰に巻いてタンクトップの姿で。

勿論直ぐに目を逸らした。

「ん？あー、雪風ちゃん達どうしたのかしら？あと、そちらの男性は？」

「何で目を逸らしてるのかしら？」

「………自分の姿を見てみると良い」

「あ………」

俺の指摘に初めて気が付いた様でゴソゴソと布の擦れる音が聞こえ、音が止むと声がかけられた。

「えっと、初めまして。私は工作艦の明石よ。それでこっちは……」

「実験用軽巡洋艦の夕張よ。貴方の名前は？」

「ああ、大和型戦艦五番艦甲斐だ。今日この鎮守府にやって来た。よろしく頼む」  
名前を名乗ると明石と夕張は目をキラキラさせていた。

「貴方の艤装見せて!!」

凄じ剣幕で思わず引いてしまった。

「えっと、今は案内して貰っている途中だからまた今度な」

「絶対だからね！」

「待つてるわよ！」

二人に苦笑いを返していたら雪風に手を引かれた。

「次行きましょう！」

「そうだな行くk——」

『陽炎型駆逐艦九番艦時津風、同型艦十番艦天津風。遠征の時間だ。速やかに二番  
ドツグに集合せよ』

「あ……」

「忘れてたみたいだな？」

からかうと二人は顔を赤くしていた。

「ははは、まあこれから居るんだ。また話せるさ」

優しく頭を撫でてやると、時津風は嬉しそうに、天津風は照れ臭そうにしていた。

二人と別れ、雪風と手を？いで鎮守府を回った。甘味処、居酒屋、酒保、お風呂場、ドッグを回り、歩き疲れた雪風と一緒に棧橋から足を出してプラプラしながら、夕焼けで海が赤く染まって綺麗だった。

「……」

「~~~~~♪」

雪風は自然に俺の膝の上に乗る、鼻歌を歌うほどご機嫌だった。

「……ま、いつか」

雪風の頭に手を乗せて優しく撫でていると、背後から足音がして振り返ると、武蔵姉が来た。

「何処に行ったかと思っただぞ？」

「ゴメン、雪風に鎮守府を案内して貰ったんだ」

「あ、武蔵さん！」

雪風は俺の膝から降りて武蔵姉の手を引いて俺の横に座った。

「全く雪風には敵わないな」

「……そうだな」

俺、雪風、武蔵姉の順番に横一列で座り、他愛ない話をしていたら、武蔵姉は思い出

したかのように手を打った。

「甲斐、お前の部屋が用意できた。荷物も既に運んであるから荷出ししてこい。」

「わかった。だけど、部屋の間所分らないぞ?」

「雪風、甲斐を寮の二階の角の部屋に案内してやってくれるか?」

「分かりました!雪風にお任せ下さい!」

「頼むな雪風。んじゃ、行ってくるよ」

「ああ、終わったら食堂に来てくれ。夕飯の序でお前達の紹介をする」

「りよーかい」

俺が立ち上がると雪風は自然に俺の手を握ってきた。

「行くか?」

「はい!」

雪風と棧橋を後にしているとボソツと後ろから声が出た。

「……まるで親子だな」

内容までは分からなかったが、おそらくだが褒められては居ないだろう。

寮に入ると、他の艦娘が俺をジロジロ見ていた。

「……(ロリコンだと思われていませんように)」



心の中で強く願っていると、やっと自分の部屋に到着した。

「着きました！さあ、早く荷出しを終わらせちゃいましょう！」

「手伝い有難うな」

雪風と部屋に入ると、何故か浜風と磯風が荷出しを始めていた。

「甲斐さん、遅かったじゃ無いか。」

「荷出し、ほとんど終わりましたよ。後は、その：／／／」

浜風は一つの中くらいの段ボール箱をチラチラ見ながら顔を赤らめていた。

「……………??」

俺と雪風は何のことか分からずに首を傾げていると、磯風がその段ボールを開けて中から何かを取り出した。

「この段ボールにはこれが入っていたんだ。何処に仕舞えば良いか分からないから置いておいたんだ」

磯風が取り出したのは俺の下着だった。

なるほど、これは困るな。俺も逆の立場なら困るもん。

「ああ、そういうことか、やっとくから磯風はそつちの刀掛けを組み立てておいてくれるか？」

「わかった。浜風手伝って……………どうした浜風？」

「……／＼／＼」（プルプル）

「浜風ちゃん、前が見えませんか！」

浜風がいつの間にか俺も横に来て雪風の目を塞いで顔を真っ赤にしてプルプルと震えていた。

「磯風え／＼／＼何で平気何ですか!?!その…男の人の…し、下着を…／＼／＼」

「?それがどうしたんだ?」

磯風と浜風の言い合い（?）を聞き流しながら自分の下着をタンスに仕舞って、磯風が組み立ててくれた刀掛けに刀を飾り、その近くに槍も飾って片付けが完了した。

## 第七話 歡迎会（1）

片付けを終わらせ、浜風がどこからか持つてきていたお茶を飲んでゆつくりしていた。

「ん〜…」

「どうしました？」

「いや、汗ばんだから着替えようと思ってな……まあ、居ても良いが」

そう言いながら着物を留めている帯を緩めようとしたら、浜風は顔を一瞬で真っ赤にさせていた。

「磯風、雪風姉さん行きますよ!!」

「お、おい？」

「甲斐さん、また後で会いましょう」

浜風に手を掴まれて磯風と雪風は部屋から去って行った。

「彼処まで焦らなくても良いのにな」

浜風の狼狽えように思い出し笑いを浮かべ帯を緩めて上だけはだけて襦袢を脱ぎ汗を軽く拭いて新しい襦袢に着替えて、ふと思いつ出した。

「そういえば……風呂はどうなんだろう……」

このまま汗は拭くだけだったら嫌だな。

服を整え畳に座ると、不意に眠気が襲いかかってきた。

「あく……少しだけ……寝るか」

来る途中の戦闘で疲労していたのか壁に背を預けたら直ぐに瞼が重くなって、それに抗わず眠りに着いた。

「ん〜？あれ？」

寝ていたはずなのだがふと目を開けると船の甲板上に立っていた。

「甲斐の上か」

『そのとうりじゃ、先の戦闘は見事じゃったな。』

「それはどうも、早速俺を呼んで、どうしたんだ？」

『いや……いいにくいんじゃが……』

甲斐はポリポリと頬を搔きながら少し照れ臭そうにしていた。

「遠慮は要らねえよ？」

『うむ……ならば、酒を飲みたいと思つてな。』

「……は〜」

甲斐の言葉に思わず、間拔けな声で返事をしてしまっていた。

「いや、どうしてだ？」

『我は進水式も済ませぬまま生を閉じた。だが一度…我の上で技師の物等が酒盛りをしてな。ふとした時に我に零したのじゃ』

昔のことを語る甲斐はなんだか嬉しそうで微笑ましかった。

『その時に感じた酒の味が忘れられなくての……不躰ながら頼んでいるのじゃ』

甲斐の目はいつも通り真っ直ぐだった。

「わかったよ。だが、俺は酒を飲んだことがねえから、弱くても文句言うなよ？」

『うむ、感謝するぞ』

俺は此処であることが気になった。

「俺が飲んでも酒の味は分かる物なのか？」

『うむ、主と我は魂で繋がって一心同体なのじゃ。故に先の戦闘の高揚も感じるし、主の食べた物の味もしつかりと分かるのじゃ』

「便利なのか、不便なのか……」

苦笑いをして頭を掻いていると、甲斐はふと顔を上げた。

『どうやら向こうに主を呼びに来た者が居るようじゃ。』

「なら、帰らねえとな。まあ、また来るわ」

『うむ、待っておるぞ』

「ん……ん？」

「やつと起きた」

目を覚まし前を見ると、背中まである銀髪に、黒い帽子を斜めに被り、無表情な顔で俺をのぞき込んでいる響が居た……何故か俺の膝に座った状態で。

~~~~~響Side~~~~~

私の名前は響、その活躍ぶり（ニココ動画等）からフリーダム響の異名があるよ。私は鳳翔さんのお手伝いで新しく着任した三人の歓迎会の準備をしていたんだ。

もうすぐ出来るところで私は何時の間にか食堂に来ていた武蔵さんと呼ばれたよ。

「なんだい？ 私は今鳳翔さんが作った料理の味見役で忙しいんだけど」

正直に言ったら武蔵さんにそこそこ強い力で叩かれた。

「くくくっ!」（カリスマブレイクで頭を押さえている）

「響、甲斐を呼んできてくれるな？」

「はい……」

まだジンジンする頭を撫でながら、甲斐さんがいる寮に向かった。

「甲斐さん、入って良いかな？」

扉をノックしたが、部屋からは何も反応が帰ってこなかったよ。

「……………？甲斐さん？…入るよ？」

扉には鍵が掛かっておらず、そのまま開いた。

「お邪魔するよ？」

扉の端からチラリと中を覗くと甲斐さんは座って壁に背を預けて寝ていた。

「全く、こんな美少女が来たのに寝ているなんて、それに、久しぶりに合うのに連れな
いんじゃないかな？」

聞かれているハズ無いのに思わず眩いてしまっていた。やっぱり、あの時私は寂し
かったのかな。

部屋に入り扉を閉めてゆっくり甲斐さんに近づき軽く身体を揺すってみた。

「甲斐さん、起きて」

「……………」

「起きないね……………よいしょ」

思わず甲斐さんの膝の上に乗ってしまった。

「……………までしても起きないんだね……………意外と強情なのかな？」

ジーッと甲斐さんの顔を眺めていたらやっと目を覚ました。

「ん……………ん？」

「やっと起きた」

「……ひびきっ？」

寝起きだからかな？少し舌足らずになってるね。

「うん、武蔵さんに甲斐さんと呼んできてって言われたんだ」

甲斐さんは「そうか」と言っって私の脇の下に手を入れてどかしてきた。

「なにをするんだい？」

少しくすぐったかったのを我慢して文句を言ったよ。

「立つのに邪魔になるだろ？にしても……あの時以来だな。いまは……寂しそうな顔はしてないな。」

「っ!？」

寂しいと思っていたのを知っていたのかのように、甲斐さんは私の頭を優しく撫でてきた。

「……流石にこれは恥ずかしいな／＼／」

自分の顔が赤くなっているのが分かる位に熱くなってきた。

「も、もう撫でるのは良いから／＼／早く食堂に行かないと武蔵さんに怒られちゃうよっ。」

「それは恐ろしいな、行くか」

「うん」

甲斐さんは笑いながら出口の方に歩いて行ったから私も追いかけるように、甲斐さんに着いていった。

甲斐さん、В следу ю щ и й раз я буду за щ и щ а т ь в а с ……。

~~~~~響SideEnd~~~~~

呼びに来てくれた響と一緒に食堂に向かっていると、信濃姉が響と同じ帽子を被った黒髪の子と手を?いで歩いていた。

「……響」

「なんだい?」

「手、?いでやろうか?」

「えっ?ちよっ!?!//」

響の返事を待たずに手を取ってやると元々白い肌が面白いくらいに赤く染まっていた。

「おーい、信濃姉」

「?あら、甲斐。それに、響さん?どうしました?」

「……何でもないよ」

響は信濃姉から顔を背け帽子で顔を隠していた。

「えーつと君は初めましてかな？俺は大和型戦艦の五番艦、甲斐だ。」

「私は暁型一番艦の暁よ！一人前のれいでいとして扱ってよね！」

「そうか、よろしくな、暁」

帽子を取って信濃姉に渡してから頭を撫でてやった。

「うん、よろしく……って頭撫でないでよ、もう子供じゃないのよ！」

「そうだな、悪い悪い」

言いながら撫で続けてやると途中から文句を言わなくなり顔を見てみた。

「……………♪♪」

どうやら嬉しいみたいでニコニコしていた。

「あ、信濃お姉ちゃん！甲斐〜！」

「……………！」

「おっ」

暁は俺の手から逃げて信濃姉の後ろに隠れていた。

声のする方を見たら紀伊が暁、響と似た服を着ている雰囲気似ている二人を抱きかかえながらやって来た。

「……………響」

「なんだい？あ、抱えなくて良いからね？」

「……………」

先手を打たれ、なんとなく響の頭を少し乱暴に撫でてやった。

「えっ、なんで!？」

文句を聞かず撫で続けてやったら紀伊が直ぐ側まで来ていた。

「甲斐、響さんの髪が非道いことになってるから止めてあげなさい？」

信濃姉の言葉で撫でるのを止めると、響の髪はクシャクシャになっていたから、謝罪の意味を込めて整えるように髪を撫でた。

「全く、女の子の髪は命の次に大事なんだよ？」

「悪かったって。紀伊、そっちの二人は？」

「私は暁型駆逐艦三番艦の雷（いかづち）よ！雷（かみなり）じゃないわよ！」

「暁型駆逐艦四番艦の電です。どうぞよろしくお願いします。」

「戦艦甲斐だ。非常に不本意だが紀伊の弟だよろしくな」

一旦響を撫でる手を止めて紀伊が抱えている二人をなでた。

「ええ！分からないことがあったら私を頼って良いのよ！」

「はわわわ／＼／＼」

雷は嬉しそうに撫でられていて、電は少し恥ずかしそうだった。

「ふふ、そろそろ行きましよう？武蔵姉様に怒られるのは嫌ですから。」

信濃姉の言葉に頷いて、二人から手を離し、つい好奇心で響を肩車してやったら、案の定顔を真っ赤にして可愛かった。

## 第七話 歡迎会（2）

「……………」

食堂前で響を下ろすと、真つ赤な顔になり、目にうつすらと涙を浮かべて上目遣いで睨んできた。

そして、雷、電は響を見てニマニマ微笑ましいのを見る目で見ていた。暁はキョトンとした風に響を見ていた。

「全く、甲斐？ちゃんと響さんに謝りなさいよ？」

「そうだよー。言うこと聞かないと……甲斐がお風呂に入つてるときに突撃してやるぞー」

「紀伊、マジでやつたら朝日を見れなくしてやるから」

「甲斐……目がマジで怖いよ……？」

紀伊は信濃姉の後ろに隠れながら虚勢を張っていた。

「……悪いな、ちよつと遊びすぎた」

「……気にしてないよ。少し恥ずかしかったただけだから……でも、もうしないでね？」  
「わかった。許可を得てからやるよ」

「……………」

「(い)ふっ!？」

響の小さな拳が丁度俺の鳩尾に突き刺ささり、思わず蹲ってしまった。

「まあ、分かつては居たさ」

「だ、大丈夫?」

響はそっぽを向いていて、暁が優しく俺の背中を撫でてくれていた。

「姉さん、甲斐さんに優しくしなくても良いよ。戦艦だからね」

「そうなの?」

「そうだよ」

暁は純粹すぎるようで上手く響に言いくるめられていた。

「なんというか……」

「うん、今のは甲斐が悪いね!」

姉二人も結構非情だった。

「お前達そろそろ…甲斐、何をしているんだ?」

「……姉の言葉に打ちひしがれていたところ」

「……そうか、暁型四姉妹は中に入って席に座っている」

四人は武蔵姉に言われて食堂の中に入っていきチラッと入り口を見ると響がほんの

り口元に笑みを浮かべていた。

「さて、お前達にも入って貰うわけだが……」

どうにか回復して立ち上がり、武蔵姉の前に並んだ。

「簡単にだが挨拶もして貰う、内容を考えておけよ？」

「分かりました」

「はい……」

「……………了解」

「おい、甲斐なんでそんなに間が空いた？」

武蔵姉の言葉を聞いてない振りをして、挨拶を一応考えておいた。

無視をした罰で武蔵姉に頭を掴まれもしたが、無事に食堂の中に入った。当然俺が最後尾で。

俺が歩いていると会ったことの無い子や、一度会ったことがある子が何やらコソコソ話をしていた。内容までは分からなかったが……。

『皆、今朝話していたと思うが、今日付でこの鎮守府に新たな戦力が加わった。私と大和の姉弟の三人だ。挨拶を』

武蔵姉からマイクを手渡され、信濃姉が一步前に出た。

『大和型戦艦三番艦の信濃と申します。産まれて間もなく足を引つ張るかも知れませ

んが、ご指導の程よろしくお願い致します』

信濃姉が頭を下げてお辞儀をすると、食堂の人達から拍手を貰っていた。

「はい、紀伊。頑張つてね」

「う〜…緊張するなあ」

紀伊は緊張してると言いながら、楽しそうな表情で信濃姉からマイクを受け取った。

「初めまして、大和型戦艦四番艦の紀伊だよ。練度は低いけど頑張つて強くなるから皆宜しくね!」

紀伊は人懐っこい笑顔で喋っていた。

「次か……」

「大丈夫?」

ふと横を見ると大和姉が居て俺を見上げていた。

「まあ、なんとかやってみるよ。」

「ほい、ガンバだよ!」

「はいはい……」

紀伊からマイクを受け取って前に出ると一気に視線が俺に向いた。

「……大和型戦艦五番艦甲斐だ。見知った顔も居るが、改めて宜しく頼む。今度は、皆と一緒に戦える。期待してくれ」



マイクを切つて姉の方を見ると全員艤装を展開していた。

「甲斐も展開しろ」

武蔵姉の指示で艤装と槍を出すと、食堂に居る全員は驚きや、関心したような歓声をあげていた。

紹介が終わり、歓迎会パーティが始まり何処に行こうかとジュースの入ったコップを持って食堂を見回していたら、一航戦の赤城さん、加賀さんと鳳翔さんの三人がやつて来た。

「初めまして、一航戦の赤城です。甲斐さんの事は鳳翔さんから伺いました。期待しておりますね」

「初めまして。同じく一航戦の加賀です。頼りにさせて貰うわね」

「改めて、大和型戦艦の甲斐だ。あの一航戦のお二人に期待されるなんて光栄ですよ」裏表もない事を言ったら、鳳翔さんは「あらあら」と頬に手を添えて微笑んでいた。

「貴方の砲は何センチなの？」

「五十一センチ砲です。大和姉達の砲より五センチデカイ砲ですよ」

「そう、火力は相当な物なのね。それに、指揮も得意そうだつて天城が言っていたわ」別に、俺じゃなくても天城さんか信濃姉が指示していたと思えますよ」

「そうかしら？戦術を知って居なければ出せない指示だと思うけど」

加賀さんの正直な賞賛に微妙に照れてしまい、顔を赤城さんと鳳翔さんの方に向けると、ニコニコしてこつちを見ていた。

「えつと、まあ、有難う御座います」

頬を搔いて御礼を言うのと、加賀さんは満足したように頷いて赤城さんと食事に向かつていた。

「加賀さんは天城さんを護つて貰つて嬉しかったんだと思いますよ？」

「……そうなんですな」

鳳翔さんは直ぐに調理場に戻つていった。

「あ、酒呑んでみるかな」

コップのジュースを飲み干しお酒が置いてあるテーブルの方に向かうとガバツと誰かに肩を組まれた。

「久しぶりだねえ〜甲斐〜ヒックツ」

肩を組んできたのは隼鷹で既に出来上がっていた。

「離しやがれ酔っ払い」

手を振りほどこうとすると今度は反対側から肩を組まれた。

「隼鷹だけずるいわよ〜ねえ、甲斐君？お姉さん達と呑まない？」

「久しぶりの再会なんだから我慢しろよな〜千歳え〜」

千歳さんの呼吸も既に酒臭く出来上がっているようだ。

「あの、離してくれないかな？」

「さあ、一緒に呑むぞ〜」

話を聞いて貰える訳も無く俺は二人に引つ張られ、酒飲み達が集まっているテーブルに連れて行かれ、コップに日本酒を注がれた。

「……ん」

思い切つて呑んでみると案外悪くない味で、思わず一気飲みをしてしまった。

「おお〜やるねえ〜。んじゃもう一杯」

「そこまで呑まないからな」

「分かつてるつて〜」

隼鷹はまた酒を一杯まで注いで来た。

「一気はもうしねえよ？酒はゆっくり呑むのが一番そうだからな」

「かあくお堅いねえ〜」

隼鷹の言葉を無視し、今度は味わうように酒を呑んでみた。

したに少しピリツと刺激があったが、それ以上に呑みやすく、穴から抜ける香りがフルーティーで呑みやすかった。

「甲斐君、これどうぞ。お酒に合うわよ」

千歳さんが差し出してくれたのは、モツの味噌煮込みで匂いだけで美味しいと分かるほどだった。当然、食べても凄く美味しかった。

隼鷹や千歳さんの呑兵衛組が次々に落ちて行つたので、そのうちに美味しかった日本酒の瓶とモツ煮を貰いその場から脱出した。

「ふう…一息つけるな」

食堂からバレないように抜け出し、月明かりで明るい棧橋の端に腰をかけモツ煮を摘みながら酒を呑んでいると、足音が聞こえ振り返ると、提督と響が居た。

「あの子達のペースに付いて行けるなんて凄いわね？」

「きつと甲斐さんが強いだけだよ」

「どうしたんですか？ 歓迎会、まだ続いでるでしょ？」

尋ねてみると二人は俺を挟むように隣に座った。

「甲斐君が外に出るのが見えたから来てみたんだよ」

「私も司令官と同じ理由だよ。まあ少し風に当たりたかつたのもあるけどね」

響も呑んでいるのか月明かりに照らされている顔はホンノリと赤みがかかっていた。

「響も呑むか？ コップこれしかないが」

「勿論頂くよ。さ、ついで欲しいな？」

「はいはい」

響が持っているコップについてると着物の裾を軽く引つ張られ、つぎ終わってから振り向くと提督がニコニコしていた。

「甲斐君、私も後で頂戴？」

「提督も、呑んでるんですね……」

提督もよく見れば頬が赤くなっていて、目がトロンとしていた。

「うん〜」

「はい、司令官。美味しいよ」

響は一杯まで日本酒を入れたコップを提督に渡していた。

「響、おまつ——」

「ありがとう〜」

提督はそのまま日本酒を一気飲みしてフラフラして俺の膝に頭を乗せて来た。

「響……提督は唯の人間なんだから俺達みたいなペースで吞ませたら駄目だろ……？」

「いや、分かっていたんだけどね？ つい魔が差して」

「はあ……武蔵姉呼んできてくれ」

「分かったよ」

響は食堂に向かおうとして動きを止め俺を見てきた。

「なんだ？」

「提督に変な事したら駄目だからね？」

「……今度は皆が居る前で抱っこしてやろうか？」

「……じゃあ呼んでくるね」

「頼むぞ……」

響は逃げるように小走りで食堂の方に向かっていった。

「……」

「くう……すう……」

なんとなく手持ち無沙汰だったので寝ている提督の頭を優しく撫でてあげた。

「ん……」

撫でると少し擦ったそうに身体を動かしたが、起きることなく穏やかな寝息をまた立て始めた。

「……何やってんだ俺は」

撫でながら酒を引っかけていると足音が二つ近付いてきたから振り向くと、響と少し呆れ顔の武蔵姉が居た。

「提督は酒が弱いのを伝え忘れていたな……」

「吞ませたのは俺じゃなくて響だからな？」

「甲斐さん!？」

「はあ……まあ良い。提督は此方で引き取ろう、甲斐はどうする？戻るか？」  
「いや、もうちよい此処で呑んでるよ」

「そうか」と武蔵姉は提督を担いで提督の私室がある本館の方に歩いて行つた。  
響はコップをもう一つ持っていて俺の隣に座つた。

「姉妹達のとこに居なくて良いのか？」

「姉さんも雷も電もお酒苦手なんだよ。駆逐艦で飲めるのはほんの数人だよ」  
響と話ながら呑んでいると何時の間にか一升会つた日本酒が無くなつていた。

「無くなつたなあ」

「これはあるけど？」

「それは仕舞つとけ」

響が取り出したのはウオツカで即仕舞うように言つたら渋々スカートにあるポケットに仕舞つていた……ポケット？

「どうかしたかい？」

「いや……何でもない」

突っ込んだら駄目だと思つて深く聞かないで片付け始めた。

「もう仕舞うのかい？」

「ああ、今日はちよつとした戦闘に巻き込まれてな。疲れたんだと思う」

「添い寝してあげようか？」

「……………フツ」

「何で鼻で笑ったのかな？ねえ、聞いてるかい？」

響を無視しコップと空になった一升瓶を持って食堂に戻った。途中響に何度も聞かれたが、頭を撫でてあげたら大人しくなってくれた。

食堂の中はお酒で酔っ払った人が多く居たから、見つからないように鳳翔さんに空き瓶とコップをお願いして自分の部屋に戻った。

「ふう……………ちよつと飲み過ぎたかな…」

電気を付けないで窓を開けて外の空気を入れると火照っている身体に丁度良い風が入ってきた。

「寝るか」

押し入れから薄手の毛布と枕だけを取り出し畳を布団にして眠りに着いた。

部屋の鍵を掛け忘れて居るのは次の日に気が付いた……………。



## 第八話 朝の手合わせとお昼の釣りと・・・・

次の日の夜明け前、何故か暑く俺の匂いじゃ無い甘い香りがしてふと目を覚ますと、何故か俺の姉妹達が固まるように寝ていた。

武蔵姉だけは俺から離れて寝ていたが、右腕を大和姉、左腕を紀伊、そして信濃姉が俺の太ももをそれぞれ枕にして寝ていた。

「……………暑い……………動けねえ……………」

首を上げて窓を見てみると、空がうつすらと明らんでいた。

「……………起きるか」

どうにかして大和姉と紀伊を腕から引き剥がし、信濃姉をちよつとした嫌がらせで紀伊のお腹を枕にさせておき更に大和姉を紀伊にくつつけておいた。

武蔵姉には俺が被っていた毛布を掛け音を立てないように、槍と刀を持って自分の部屋から出た。

「……………なんで自分の部屋から出るだけで気い使わなきやならねえんだよ……………」

寮から外に出て、姉妹まみれだったのを紛らわすために鎮守府の裏手にちよつと広めの広場があるのを思い出してそこに向かった。

「結構広いな」

其処は思っていたよりも広くて槍を振り回しても大丈夫そうだった。

「さて……やるか」

十文字槍を長く持ち、剣を振る要領で素振りを開始した。

槍の真ん中、槍を短く持った素振りをそれぞれ二百回して一息ついたら太陽が海から半分ほど出ているところだった。

「今は……大体五時くらいか……？そろそろ戻るか……なっ!!」

背後から鋭い闘気と刃物が風を斬る音が聞こえ槍を背後に持っていくと丁度そこに鉄同士が当たる甲高い音が響いた。

「へえ……槍なんて唯のお飾りだと思ってたが、中々やるじゃねえか」

「そりやどうも、んで？何用かな？」

槍をそのままに振り向くと、眼帯をして、アンテナ？みたいなのが耳のように頭の横に浮かせていて、俺に真っ直ぐ刀を押し付けてる女の子がいた。

「別に用つてのは無いぜ？俺とやり合つて欲しいだけだ！」

女の子はそう言いながら一度離れた。

「俺の名は天龍、フッフ、怖いか？」

「全然？」

「なっ!? 怖くねえのか!？」

天龍はヤイヤイ言いながら自分はどれだけ怖いか言つてたが、その様子が微笑ましく見えた。

「つてそんなことはどうでも良い! 一手、手合わせ願うぜ、大和型戦艦五番艦の甲斐さん!」

「面白い、受けて立つぞ、天龍型一番艦、天龍!」

お互い得物を構えると、天龍は楽しそうに走つてきて上段から刀を振りをろしてきた。

「おっと、中々鋭い太刀筋だな」

槍の柄で刀の腹を撫でるようにして刀の軌道を変えて避けた。

「ちっ! 簡単に避けてくれるじゃねえかよ!」

「どう動けば良いか簡単に分かるからな」

天龍の攻撃は型にはまらない実戦型でどんな態勢でも強引に攻撃を仕掛けてくるから、何処に槍を置いていれば刀を止めれるか分かり易かった。

「面白いことしてるじゃ無いかよ!」

今度は背後から、殺気と共に刃が振り下ろされてきたから咄嗟に艤装に含まれる槍を

取り出してソレを受け止め、チラリと相手を見ると天龍とは反対側の目に眼帯をしてマントを着けた女の子が洋刀（サーベル）を持ちニヤリと笑っていた。

「邪魔すんなよ木曾！」

「そう言いながら、苦戦してるじゃねえかよ！」

「いやあ……二人同時は、流石にキツイねえ」

「そう言いながら余裕じゃねえか!?!」

天龍と木曾？が言い合っている間にも俺への攻撃の手は休まる暇も無く、二人の攻撃を捌いたり避けたりしているのと、明らかに攻撃の手が増えていて、おかしいと思いついて、こらしてみようと、天龍と木曾の刀とは違う槍が繰り出されていた。

「ちよつと待て！もう一人増えてるぞお!?!」

「あらくバレちゃったわねえ〜」

三人目を見ると、ワンピースを着て頭に輪っかを浮かべニコニコしている子が、匠に槍を操り天龍と木曾の隙を無くすような攻撃の仕方をしていた。

「君が、一番つと……戦い、慣れてるな？」

「ウフフ〜そうかしら〜？」

この子は明らかに慣れていて、集中してないとコツチがやられてしまう様な感覚だった。

「俺の、事は……知ってると思うが、君の名前は？」

木曾、天龍の刀を持ってきていた十文字槍の刃と刃の間で受け止め、女の子の槍を臙装の十文字槍で受け止め名前を聞いた。

「私？天龍ちゃんの妹の龍田よ、宜しくね。甲斐さん？」

「こういう物騒な挨拶の仕方は勘弁だけど……な！」

「オワツ?!」「あら〜？」

三人の武器を絡め取ろうとしたが、龍田の槍は絡める前に引かれ、天龍と木曾のしか奪えなかった。

「くっそー！負けたかー!!」

「甲斐さん強すぎるだろ……」

二人は各々の得物を鞘に仕舞い地面に座り込んでいた。

「君も、まだやるかい？」

「止めておくわ、一人だけだったら勝てないと思うから〜」

臙装の槍を消し、持ってきていた槍を肩に担ぎながら聞いてみると、ニコニコした顔のまま

龍田は持っている槍を引いた。

「はあ……やつと終わったか……」

槍を地面に置き座ると、緊張が解けたのか一気に汗が溢れ出してきた。

「お疲れ様ね〜」

「む……ありがとな」

龍田からペットボトルに入れられたお茶を渡されたのでありがたく貰った。

「天龍ちゃんと木曾ちゃんの相手をしてくれたお礼だから気にしないでね〜？」

「なら、遠慮無く貰うわ」

「ええ」

龍田から貰ったお茶は既製品ではなく、手作りの麦茶だった。

「ふう……シャワー如何するかなあ」

持つてきていたタオルで首筋に浮かぶ汗を拭いながら、小さく愚痴っているとスピー

カーから起床ラッパが聞こえてきた。

「甲斐さんがシャワー浴びてる間、俺と龍田が入渠場を抑えておこうか？」

「呟きが聞こえていたのか天龍が提案をしてくれた。」

「良いのか？俺としては有難いが」

「おう、その代わり、また手合わせしてくれよな！」

「まあ、その位ならお安い御用だ」

「それじゃあ、入渠場を見てくるわねえ〜。甲斐さんは着替えを持って来てね」

「了解だ。龍田、お茶ありがとな」

龍田に礼を言いながら槍を肩に担ぎ自分の部屋に戻った。

部屋には皆居なくて毛布と枕は片付けられていた。

下着と襦袢の替えを持って入渠場に行くと、天龍姉妹の代わりに武蔵姉が立っていた。

「おはよ、武蔵姉。俺の部屋で寝てるとは思わなかったよ」

「おはよう甲斐。紀伊の提案でな、あと、毛布ありがとうな。それより、今は中に誰も居ないから早く入ってこい」

武蔵姉に礼を言い入渠場に入ってシャワーで汗を流した。

……野郎のシャワーシーンなんて要らないだろ？だからこれだけだ。

シャワーを出て、洗濯物を入渠場に居た妖精さんに任せ、タオルを首に掛けたまま武蔵姉と食堂に向かった。

「おはようございます、甲斐さん。此方が戦艦組の朝食ですよ」

厨房に立っていた鳳翔さんから戦艦用のド力飯を用意して貰った。

「おはようございます鳳翔さん。ありがとうございます」

朝食の乗ったお盆を持ち、武蔵姉と一緒に席に着いた。

「所で武蔵姉、大和姉達は？」

「ん……大和達は先に朝食を済ませておしゃべりをしている筈だ」

「そっか」

他愛ない話をしつつ朝食を済ませ、鳳翔さんにお礼を言ってから食堂を出た。

-----

「何で連れてこられたんですかねえ……？」

腹ごなしに散歩をしていたら明石、夕張の二人に腕を掴まれて工廠に連れてこられた。

「昨日言ったじや無い！ 艦装を見せてって!!」

「そうそう、色々データ取らせて!!」

「……艦装を見せるだけで、弄らないでくれよ？」

「うん!」「任せて!」

二人の返事に何故かかなり不安を感じたが、艦装を展開して見せた。

「わあく! 凄いわね! 資料でちよつとしか見なかったけど、やっぱり迫力があるわね! 五十一センチ三連装砲は!」

「明石見て! 艦装のパワーも出力費が大和さんや武蔵さんの1.5倍あるわよ!!」

「わー!! 凄いわね!!」

「……」



艀装に夢中になってゐる間に艀装を外して台に置き工廠の外に出た。出る前に何故か妖精さんに釣り竿とバケツを渡され、俺の肩に俺の艀装に着いている妖精さんが乗つてきていた。

「はあ……あの二人は夕方までやってそうだなあ」

渡されたバケツを見ると、丁寧な餌や各種の道具が揃つていた。

「なんか魚を釣つてこい。つて事かねえ」

やる事が無いのも確かだったので、昼食序でに魚を釣ることにした。

「あ、妖精さん。鳳翔さんから七輪と塩と箸とお皿借りてきてくれるか？」

「（、・ω・）b」

棧橋で仕掛けの用意をしながらお願いすると、妖精さんはキリツとした顔で親指を立てて食堂の方に飛んでいった。

「帰ってくるまでに一匹でも釣つておこうかな」

仕掛けに餌を付けて海に投げると直ぐに浮きが反応して、引き上げてみると、小さいアジが掛かつていた。

「少し……小さいが、まあ良いだろ」

バケツに海水を入れ、アジを容れたら妖精さんが何故か女の子を引つ張つてやつて来た。その子の手には七輪があり、妖精さんは残りの物を器用に持つてきてくれた。

「妖精さんありがとう」

「（\*、▽、\*）」

嬉しそうな妖精さんにホッコリしてから手伝ってくれていた女の子を見た。

「君は……初めましてかな？」

「あ、はい。朝潮型駆逐艦一番艦の朝潮です。宜しく願います、甲斐さん」

女の子、朝潮はピシツとした敬礼をして真面目な印象が伺えた。

「ああ、よろしくな……ってもう焼いてるのか」

なんか煙たいと思ったら、妖精さんが俺の釣っていた魚を焼いていた。

妖精さんの焼くペースに負けないように釣っていたら、朝潮のことを忘れていた。

「えーつと……」

「え？あ、ああ…妖精さんを手伝ってくれてて有難うな。お礼の代わりに妖精さんが

焼いてくれた魚食べてやってくれよ」

「いい、良いのでしょいか？」

「良いって。ほら妖精さんもそう言ってるし」

「（・・・ω・・・）」皿

妖精さんは魚の乗ったお皿を朝潮に差し出して、朝潮は遠慮気味に受け取って

た。

「い、頂きます」

朝潮も栈橋に座り、一口魚を食べると嬉しそうに顔を綻ばせて魚を食べていた。俺も焼き魚を食べ、朝潮と妖精さんと話しながら釣りを続けていた。

バケツが一杯になるくらい魚を釣り、そろそろ仕舞おうかとした時、竿に今日一番の強い引きがあつた……が、重くなつたのは最初だけで、後はただ重いだけでゆつくりと巻けていた。

「大物かと思いましたが、何かが引つ掛かつたみたいですね？」

「そうだな……大物かと思つたのになあ」

「（・・・）（・・）（・・）（・・）」

妖精さんも残念そうな顔をしていた。

「妖精さん、魚を工廠の妖精さん達に渡してきて」

「（・・・）（・・）（・・）（・・）」

妖精さんの小さな身体の何処にあんな力があるのか、バケツを頭の上に乗せ走るように工廠に向かっていった。

「あ、甲斐さん影が見えてきましたよ」

朝潮は栈橋から身を乗り出すように海面を見つめていて、落ちないかハラハラしながら海面を見ると、ユラリと水面が揺れ一気に引き上げると、ゴミでも何物でも無く、白

い肌、銀色の髪を腰の辺りまで伸ばし、後ろ髪を一つに纏め左に流し、黒い突起のある帽子のような物を被り、足が在るところには口みたいな物を付け、砲が付いていた。

……あ、コイツ駆逐棲姫だ。

第九話 何かを拾って家に帰ったら「元の場所に戻して  
きなさい」って言われるまでがテンプレ

「コイツあ……駆逐棲姫か」

「っ!?!深海棲艦!!」

朝潮が艦装を展開し砲を向けようとしたが、手を出して制した。

「甲斐さん!?!コイツは敵ですよ!!」

「まあ待て……よく見てみろ」

「え……?」

朝潮は主砲を下げて駆逐棲姫を見つめた。

駆逐棲姫の身体の所々は何かの攻撃を受けたみたいで傷があり、脚部にある砲はボロ  
ボロになっていて、口?には自我があるのか、唸るようにコツチに顔?を向けていた。

「コツチに君達を傷付ける気はない。話が分かるなら艦装を解除してくれないか?」

口は少し躊躇しながらも砲と魚雷管を解除してくれた。

「朝潮」

「あ、はい」

「これ、工廠の妖精さんに返しておいて」

「え？あ、わかりました。甲斐さんは？」

「ん？この子を提督に見せてくる。」

ひよいつと駆逐棲姫を抱え上げると口は警戒したような反応を見せたが、直ぐに警戒を解いてくれた。

「大丈夫なんでしょうか……」

不安そうな声で俺を見上げていたから優しく頭を撫でてあげてから執務室に向かった。

執務室の前に行き扉をノックしたら提督の声が聞こえて駆逐棲姫を支えて部屋に入ると、二航戦の飛龍さんと蒼龍さんが提督の手伝いをしていた。

「提督、ほらスゲーの釣ってきたぞ」

おどけた感じで言うと、三人の目がコツチを向き、二航戦の二人は呆然としていて、提督は顔を強張らせていた。

「甲斐君？その子を元いた場所に返してきなさい」

提督をよく見ると僅かに震えていて、飛龍さん達は艦装を展開し、弓に矢を番えていた。

「大丈夫だつて、俺が面倒見る。それに……」

一度言葉を区切り、真剣な表情に僅かに殺気を込めて三人に言った。

「俺なら、痛みを感じさせる前に殺れる……」

提督も真面目な顔になって俺の目を見てきたから、逸らさずにジツと見つめ返した。

「……っ／＼／＼」

何故か顔を赤くして目を逸らされたが。

「ねえ、えーつと甲斐君だっけ？ちよつとその子撫でて良い？」

「良いですよ。飛龍さん」

「あれ？自己紹介したっけ？」

「ああ、一応主力メンバーになる方の名簿を武蔵姉に渡されたから、覚えているんで  
す」

「なるほどね、あ、改めて。正規空母飛龍です！で、こつちが……」

「引つ張らないですよ……つと正規空母蒼龍です、宜しくね甲斐君」

「こちらこそ」

取り敢えずつと持っているのは流石に駄目だと思い、ソファーに横にさせると、飛  
龍さん達は駆逐棲姫の頭を撫でたり、ほっぺを突いたりしていた。

「甲斐君、あの子どうするつもり？」

「さつきも言ったとおり、俺が保護します。駄目なら最低でもあの子の傷が治るまで。」

「……はあ、取り敢えずこの事は私が与ります。幸いこの鎮守府の憲兵さんは優しい方ばかりですからね」

「良いんですか」

「私は何も見ていませんからね？」

提督は黙認してくれるみたいで言葉を聞いて笑顔になれた。

「有難う御座います。もう一つお願いがあるんですが」

「何かしら？」

「高速修復材の使用許可を」

「良いわよ、貴方が何に使うかは知らないけど、飛龍に手伝って貰ってね」

「分かりました」

飛龍さんに駆逐棲姫を入渠させて上げて欲しいと頼むと快諾してくれた。

駆逐棲姫……長いから姫で良いか。

姫が入渠から上がって飛龍さんに俺の部屋に連れてきて貰った。

「それじゃ、私は行くね。」

「飛龍さん有難う御座いました。」



「どういたしました。それじゃね」

ウインクを残して飛龍さんは部屋から出て行った。

姫を見ると怪我也も全て無くなっていたから、寝かせるために布団を敷いてそこに寝かした。

「……ん……ふあ……」

少ししたら姫が目を覚まし、あくびをしながら起き上がった。

「おはよう、駆逐棲姫」

「っ!？」

姫が艤装を展開しようとしたので、先を際するように槍を展開し、喉元に突き付けると、動きを止め艤装の展開を止めてくれた。

「君が手を出さなければ俺も君を傷付けない。…俺に君を殺させないでくれるか?」

「……うん」

姫が頷いてくれたから槍を消し代わりに頭を撫でてあげた。

撫でた最初は身体を硬くしていたが、撫でていると緊張が解けたのか、俺の膝を枕にし、袴を掴んで寝てしまった。

「懐かれたのかねえ」

帽子の型が崩れないように外して髪を撫でていると、部屋の扉が開き明石さんが入っ

てきた。

「甲斐さん、艤装返すね……つて深海棲艦？」

「明石さん、静かに……この子は提督にも黙認されています。知ってるのは提督、朝潮、二航戦のお二人。そして、明石さんです……意味、分かりますか？」

「なるほどね……多分武蔵さんも知ってるわよ」

「何ですか？」

「私の後ろに居るから」

明石さんが扉の前からどくと後ろから呆れ顔の武蔵姉が居た。

「武蔵姉……」

「全く……お前は世話の焼ける弟だな……鎮守府の皆には私から伝えておく。……佐世保のカステラで手を打つぞ？」

「……有難うな、武蔵姉。今度本土に戻れたら買つとくよ。何時になるか分からねえけどな」

武蔵姉は鼻を鳴らし、微笑みながら去って行った。

「じゃあ私も帰るわね」

「ああ、明石さんも有難う」

「いえいえ」

武蔵姉に続き明石さんも帰っていった。

「ん……あ……」

武蔵姉達が帰って少しした時姫が目を覚ました。

「おはよう、えーつと君のことなんて呼べば良いかな？」

「わたし、なまえ……？」

「そう、君の名前。俺の名前は甲斐」

「わたしの……なまえ……ハル……」

「はる？そっか宜しくなハル」

「……ん」

ハルの頭を撫でると嬉しそうに目を細めていた。

「所で、なんであんな所に居たんだ？君はもつと深海棲艦の巢に近い所に居ると記憶しているんだが」

「わたし、にげてきた……」

「詳しく話してくれるか？」

「うん……」

ハルの話によると、深海棲艦の方にも穏便派と主戦派が居るらしく、ハルはその穏便派の方らしい。

「わたしたち、たたかいすぎじゃない。だから、みんなとにげてきた」  
「皆？はる一人しか居なかったが……」

「……しゅせんはの、みんなのこうげきで……しずんだ。みんな、わたし、まもってくれた。だからひつしににげて、ここについたとおもう」

「そうか……頑張ったんだな」

「みんなのおかげ……みんなのぶんもいきないといけない……」

「……そっかここに居る間は俺が護つてやるよ。安心しな」  
頭を撫でて安心させてやると微笑んでいた。

「うん、ありがと……おにいちゃん」

「……お兄ちゃん？」

「うん？おにいちゃん、だめ？」

ハルが潤んだような目で見上げて服を摘まんできた。

「……その呼び方で良いよ」

「うん！おにいちゃん」

女の子の潤んだ目と見上げるに勝てる男はいないと信じている。

そんなことをしていたら武蔵姉がやって来た。

「甲斐、その子の説明を全員にしといた。安心して夕飯を食べに行けるぞ」

「提督に感謝しねえとな……」

俺が立ち上がるとはるは浮き上がり、俺の袴を掴んでいた。

「ふふふ、随分懐かれていますな。その子の名前は何と言うんだ？」

「ハルって言うんだと……数少ない向こう側の穩便派だつて」

「穩便派……攻撃を仕掛けてこない個体が居るとは聞いていたが、なるほどな」

武蔵姉は何時もとは違う優しい微笑みではるを撫でていた。

「……むさしおねえちゃん」

はるの言葉に何故か武蔵姉は感動していた。

「ハル、困ったときは私か甲斐に頼むんだぞ。」

「……わかった」

俺達は三人で食堂に向かった

## 第十話 旗艦拜命（強制）

あの後、武蔵姉と食堂に行くところなり紀伊がハルを誘拐し、大和姉と信濃姉の所で愛でているだけで、特に異常は無かった。

あ、紀伊は笑顔の武蔵姉に頭を何時もより強めにニギニギさせていた。

姉妹愛（物理）の巻き添えを喰わないために、離れた所に座っていると、隣に見知った顔が座ってきた。

「久しぶりね、甲斐」

「ああ、元気そうだな、矢矧」

隣に座ってきたのは、軽巡の矢矧だった。

「明日、通達があると思うけど、演習を近海でやるから準備しておいてね」

「わかった。」

食事を早く終わらせ、しばらく矢矧と話していたら、クイクイと袖が引つ張られたのでそつちを見ると、ハルがクシヤクシヤの頭で、目にうつつすらと涙を溜めて俺を上目遣いで見ていた。

「お兄ちゃん、いなくなってた」

「あく悪い、武蔵姉達の巻き添えが嫌で逃げたんだ。ごめんな？」

謝ると同時に髪を整えるように撫でると、嬉しそうに目を細めていた。

「甲斐、この子が提督の言っていた深海棲艦か？」

「ああ、ハルっていうんだ」

「なるほどね、ハルちゃん？初めまして、私は軽巡の矢矧よ。よろしくね」

「……わたし、ハル。よろしく……です」

矢矧が手を差し出すと、ハルも恐る恐るだが、矢矧の手を握り返していた。

ハルは姉さん達の方で食事を終わらせていたらしく、矢矧の膝の上でお茶をチビチビと呑んでいた。

矢矧と話していたら、何時の間にかハルは矢矧の胸を枕に寝ていた。

「ハルは寝ちまったか」

「甲斐の部屋で寝かしますか？」

「冗談、武蔵姉か信濃姉に任せるよ。あの二人なら安心出来るからな」

「私が持つて行きましょうか？」

「いや、俺が持つて行くよ。話し相手有難うな」

「どう致しまして、明日はよろしくね」

矢矧にお礼を言ってからハルを受け取り武蔵姉の部屋に向かった。

「む？甲斐、ハルは寝てしまったのか」

「え？」

横から声を掛けられそつちを向くと、武蔵姉がハンカチで手を拭きながら歩いてきていた。

「ああ、武蔵姉の部屋で預かって貰おうと思つて行くところだったんだ」

「タイムिंगが良かったな。じゃあ預かろう」

「ん、よろしくな」

武蔵姉にハルを渡し軽くハルを撫でてから、部屋に戻った。

――  
布団に入つて直ぐに寝たと思つたら、俺はまた戦艦甲斐の上に立っていた。

「どうしたんだ？甲斐」

「……あの深海棲艦を何故救つた？」

甲斐の目は何時もとは違い、怒気に溢れていた。

「俺の気持ちも共有できるのなら、分かるだろう？」

「……見捨てれない、助けたい……じゃろ？」

「分かつてるじゃないか。確かに、アイツは深海棲艦だ。だけど、敵意無き敵は敵に在



らず。雷……響の妹の艦長だった、工藤俊作さんの言葉だ」

「……武士道の一つかのう」

「俺は、敵意の無い相手は殺らない。コレが俺の意志だ」

「はっはっはっは!!」

甲斐は突然大声を上げて笑い出した。

「何だよ、一体」

「……いやはや、主は、我が思っている以上の懐の広さじゃ。おまけに、兄と呼ばせる

豪胆さ、感服じゃわ」

「……気に入ってくれて結構なことだ」

「主は期待以上じゃな。明日、いや、もうすぐか……演習とやらを頑張るがよい」

「ありがとよ、甲斐」

俺がお礼を言ったら、視界が白く染まり意識を無くした。

「朝か……ん？」

また布団が不自然に膨らんでいて紀伊だなど思いながら布団を捲ると、ハルが俺に抱き付いて寝ていた。

「……………これは、予想外だったな」

どうしようかと悩んでいたら、ハルが目を覚ました。

「……お兄ちゃん、おはよ」

「おう、おはよ。武蔵姉の部屋で寝てたんじゃ無かったか？」

「…………お兄ちゃんが良い」

嬉しい言葉と共にギュッとハルが抱き付いてきた。

「…………そろそろ武蔵姉がくるん——」

「甲斐!!ハルが居ないんだ!!」

バンツ〜と扉を勢いよく開け焦った表情の武蔵姉が入って来た。

「ひゃうー!」

大きな音と声にビックリしたのか、ハルは俺の背中に隠れた。

「武蔵姉、ハルならここに居るよ。ハル、黙って出て来てごめんなさいは?」

「…………武蔵お姉ちゃん、ごめんなさい」

「心配するから一言言っただけにしてくれよ?」

「…………はい」

ハルは俺の背中からヒョコツと顔を出し、武蔵姉に謝り、武蔵姉はそんなハルの頭を優しく撫でていた。

朝のちよつとしたドタバタが終わり、俺達は三人で朝食に向かった。

「お兄ちゃん、わたし、あるいたほうが、いい？」

ハルは周りをキョロキョロ見渡してから俺に聞いてきた。

「……………え？」

俺はハルの言葉をいまいち理解出来ずに疑問系で返事をしていた。

ハルの足は見た目には在るように見え、足の代わりに、口の付いた浮き輪？みたいなものがあるだけだからだ。

「ハルよ、歩くことが出来るのか？」

「……………ん」

そう言いながらハルは足に付いていたのを消した。

そこには、白いスラツとした細い足が在った。

「ね？歩ける…よ？」

「……………そうだな」

「ほう、すごいな」

ハルの姿は、セーラー服を改造したような半袖の服に、それに合わせた膝くらいまでしか無いスカート姿だった。つまりめっちゃ可愛ええ（語彙力不足）。

—————食事シーンはカット！—————

朝飯が終わった後、俺は館内放送で執務室に呼ばれたからハルを武蔵姉に任せて食堂からそのまま執務室に向かった。

「戦艦甲斐だ、入るが良いか？」

ノックしながら聞くと、扉の向こうから提督の声がした。

「失礼する……大所帯ですね」

執務室に入ると、其所には矢矧、青葉、浜風、磯風、天城さんの五人が居て、俺はその一番端に並び提督の前に立った。

「甲斐君は、この子達と一緒に私の友達が居るシヨートランドの提督の子達と演習して貰うわ。演習後はシヨートランド泊地に資材を分けに行つてあげてね」

「なる程、了解した。泊まりになると考えた方が良いか？」

「そうなるわね。五百キロの距離だけど、演習後は流石にキツイと思うから」

「了解。旗艦は天城さんか？それとも、矢矧か青葉か？」

旗艦の確認をしたら提督がニヤリと微笑んだ、コレ嫌な予感する奴だ。

「今回の旗艦は貴方よ甲斐君」

「」

## 第十一話 いざ、演習へ

提督の言葉に思わずポカーンとしてしまったが、気を取り直して、反論してみた。

「正気か提督？俺はまだ艦息になって日が浅い。艦娘として経験ある天城さんか青葉、矢矧の方が良いと思うが」

そう言ったら、提督は資料を一つ取り出しそれを確認するように見ながら、言ってきた。

「大丈夫だと思うわよ？甲斐君はこつちに来る途中に戦闘指揮をとっていたと報告受けてるし、天城から貰った戦闘詳細を見る限り、指揮能力は十分であると判断したから旗艦を任命したのよ」

何時の間に戦闘詳細をとっていたのかチラッと天城さんを見るとニコニコと微笑みを返してきた。

「……分かりました、旗艦拝命します」

「うん、それじゃ一〇三〇（ヒトマルサンマル）にショートランド泊地に向け出立し物質の護衛並び彼方の艦隊と演習を指示します。質問はありますか？」

演習に対して情報が無かったから手を挙げた。

「一つだけ良いか？」

「はい、甲斐君」

「相手の編成を教えて欲しいんだが、大丈夫か？」

「詳しい内容は知らないけど、戦艦二、空母二、重巡一、駆逐一の空母機動部隊よ」

「了解、それじゃ……皆、この後〇九三〇（マルキュウサンマル）から、出撃ドックで

装備の詳細教えて欲しい」

提督の言葉に頷き、チラツと時計を見ると〇九〇〇（マルキュウマルマル）で五人に指示を出した。

「[[[[了解]]]]」

俺の指示を受けて皆はそれぞれ執務室を出た。

――  
執務室から準備をしようと、工廠に向かう廊下を歩いていると反対側から、信濃姉とハルがこつちに向かつて来ていた。

「あ、お兄、ちゃん」

「あら、本当ね」

「おはよ、信濃姉。ハルはさつきぶりだな」

「ん」

「おはよう、甲斐」

二人に近付くと、ハルは自然に俺のお腹に抱き付いてきた。

ハルの頭を撫でながら、演習の事を思い出した。

「そうだ、ハル。俺は今日と明日ここを留守にするから、信濃姉と武蔵姉の言うことをちゃんと聞くんだぞ?」

「…お兄ちゃん、どこか、行くの?」

「ああ、ショートランド泊地までな」

そう言ったらハルは俺の服をギュツと握ってきた。

「わ、わたしも、いく」

「…悪いがそれは駄目だ。言うことを聞かないと、明日には帰って来れないかもな?」

「……武蔵お姉ちゃんと、信濃お姉ちゃんと、待つてる」

半ば脅し紛いな事を言うとハルは慌てたようにしていた。

「信濃姉そういうことだから頼むわ。武蔵姉にも言つといて」

「ふふふ、分かったわ。演習頑張つてね」

「お兄ちゃん、がんばつて」

「おう、ありがとな。んじや、準備があるから行つて来るわ」

「ハルちゃん、武蔵姉様の所に行きましょ?」

「……うん。お兄ちゃん、行って、らっしやい」

「頼むな信濃姉。おう、行って来るな」

ハルの頭を一撫でして工廠に向かった。

自分の装備の最終確認をしていたら、時間になったらしく五人が集まってきた。

「甲斐さん、皆さん集まりましたよ」

「有難うございます。じゃあ、天城さんから教えて貰っても良いですか?」

「分かりました。今回、相手側に空母が二人居るみたいなので、烈風隊を四機小隊十二部隊（四八機）と天山三機小隊六部隊（十八機）と彩雲三機にしてあります」

天城さんの後について青葉が一步前に出て装備を言ってくれた。

「青葉たちは基本の装備ですね。主砲に高角砲、機銃、魚雷、矢矧さん達は爆雷も装備しています」

報告を貰って不備が無い各人最終チェックをして貰っていると、輸送船の妖精さんがやって来て、準備OKなのか（・ω・）b としていて、時計を確認すると、一〇一五（ヒトマルイチゴウ）で少し早いですが、提督に確認してOKが出たから、出立することにした。

「それじゃあ、抜錨。ショートランド泊地に向け出航!」



「了解!!」

俺を先頭に海に出て、輸送船の速度に合わせてショートランドに向かった。

-----

鎮守府から暫く行った所で陣形を輸送船を挟むような形の複縦陣に変更した。

右翼には青葉、矢矧、浜風、左翼に俺、天城さん、磯風の布陣で航行し、俺達の頭上を天城さんの烈風隊が一部隊直援として上がっていた。

「天城さん、ショートランドからの出迎えってあるんですか?」

後ろに居る天城さんに振り返りながら質問を試してみた。

「はい、艦隊は来ないみたいですが、直援機を十二機迎えにくれるようです。輸送船は演習実施海域に到達後ショートランドの直援隊に護衛して貰う予定です」

「有難う御座います。それじゃ、天城さん彩雲を航路上に飛ばして下さい。矢矧と青葉も飛ばしてくれ、出迎えを見逃すわけにはいけないから」

「了解」

俺が五機、天城さんから三機、青葉と矢矧から二機の十機で前方の索敵をして貰った。

「矢矧一番機から入電。『ショートランド泊地ヨリ、出迎エノ直援機ヲ視認。此ヨリ艦隊二帰投ス』とのことだす」

「了解だ。青葉、矢矧は艦載機を収納、天城さんは彩雲をそのまま航路上で索敵を」

「了解しました」

俺も艦載機（零観）を呼び戻した。

俺が全機収納したとき、艦隊の上を矢矧の水上新機と、バンク（主翼を上下に振る仕草）しながら飛んできたシヨートランドの零式艦上戦闘機五二型の十二機が変態を君で飛んでいた。

『我、シヨートランド泊地所属第一直援隊、此ヨリ貴艦隊ノ直援二入ル、深海共ノ機銃一発タリトモ艦隊二向ケサセヌ』

隊長機らしい機体から無線が入ってきて、なんとも頼りがいのある事を言ってくれたから、コッチからも無線で応答した。

「直援感謝する、空の護りはお任せする。我が艦隊の機銃要員は休ませることにしよう」

こう無線を返したら、隊長機とその小隊の列機が艦隊上空で宙返りをしていた。

「ふふふ、気の良さそうな妖精さん達ですね」

「ええ、頼もしいですよ」

頭上の編隊を見ながら、演習を行う海域まで向かった。

## 第十二話 撤退戦（1）

演習海域に到達すると時間が一五〇〇（ヒトゴウマルマル）を過ぎており、日は西の方に傾き始めていた。

「そろそろ会合地点だな……」

俺の呟きが聞こえたのか、上空の隊長機から無線が入ってきた。

『直援隊隊長ヨリ、艦隊旗艦甲斐へ。我此ヨリ艦隊ヲ離レ輸送船ト共ニシヨートランド泊地へ帰投スル。会合地点迄一小隊（四機）ヲ案内ニ付ケル。貴艦隊ノ演習成功ヲ祈ル』

「艦隊旗艦甲斐より、直援隊隊長へ。此処までの案内感謝する、輸送船の直援をよろしく願います。其方も、無事な帰投を祈る」

俺の通信が終わると、離脱していく輸送船と同じように、一小隊を残し直援隊はシヨートランド泊地へ戻って行った。

辺りを見渡しながらシヨートランドの艦隊を探していたが、中々見つからずにいた。

「天城さん、偵察機から何かありますか？」

「うーん……ダメですね、艦影一つ見えないみたいです」

「……そうですか……うん？」

ため息ついでに下を見ると海面の色が、青から赤色に変わっていた。

「(海が赤い……?あれ?確か海が赤く染まるのって——っ!?)全艦第一戦闘態勢!陣形を輪形陣に変更!先頭俺!その後方に浜風、天城さん、磯風!左翼に青葉!右翼に矢矧!深海棲艦が近くに居るはずだ!偵察機発艦急げ!」

俺の声に皆急いで陣形を変更し、警戒する為にゼロカン(零式艦上水上観測機)を全機発艦させた。

「っ!?!甲斐さん!彩雲が救援信号を捕捉しました!シヨートランドの艦隊が深海棲艦の艦載機に襲われている模様!何度も繰り返し救援信号を発信しているみたいです。どうしますか!?!」

「天城さんの烈風隊全機発艦、彩雲の誘導電波に従いシヨートランド艦隊に向かい、深海棲艦機を撃破させて下さい。全艦最大船速!シヨートランド艦隊を援護する!」

「「「了解!」」」

「(間に合ってくれよ!)」

飛んで征く烈風隊を見ながら、はやる気持ちを抑えてシヨートランド艦隊に向かった。

~~~~~ショートランド艦隊Side~~~~~

私は今回ラバウル基地の艦娘と演習をするために旗艦を任命された空母翔鶴です。ラバウルの娘達は皆優秀な方ばかりだと聞いてます。それに彼方の旗艦は新人さんみたいです、旗艦の練習かしらね？

「翔鶴さんどうかしましたか？」

ボーツと考え事をしていたら私達の所に新しく入ってきた軽空母の瑞鳳さんが私をのぞき込むようにして声をかけてきました。

「ううん、何でもないわよ。ラバウルの方々はそろそろ海域に着いた頃よね？」

「はい、深海棲艦に襲われてなければ順調に来ていると思います。私達の所からも直援隊が出迎えに行っているはずですから、そろそろ会合すると思います」

瑞鳳さんは今回が初の実戦演習で航空隊の指揮を任せてあります。

私達の艦隊は私と瑞鳳さんの空母二人、比叡さん榛名さんの戦艦二人、羽黒さんの重巡一人、叢雲さんの駆逐艦一人の六人で旗艦は私が務めています。

「あ、翔鶴さん、水上電探に艦影確認しましたよ」

比叡さんが頭に付けているカチューシャ電探をピコピコさせながら笑顔で報告してきました。

「ホント？艦種は分かる？」

「はい、えつと……ん？……あれ？」

比叡さんは最初笑顔でしたが、電探を確認している内にだんだん驚愕の表情に変わって行った。

「せ、接近する艦影は深海棲艦！数およそ二十以上！それと、対空電探に艦載機の発艦を確認しました！」

「っ!? 第一戦闘態勢！瑞鳳さん、艦載機の発艦を！」

「で、でも艦載機の皆は模擬弾しか装備してませんよ!？」

「くっ!!」

すっかり失念してました。私を含め皆さんは模擬弾しか装備していません。

「翔鶴さん！私と比叡お姉様は少ないですが機銃の実弾を装備しています！」

「分かりました！なら、輪形陣に変更！比叡さんと榛名さんは両翼で対空戦闘を！他の皆さんは回避運動を！瑞鳳さんは広域無線で救援信号を！」

皆さんの指示に陣形を変更していましたが、練度が低い瑞鳳さんは少し遅れて陣形に入りました。

そうして居るうちに敵機がもう肉眼でも見える所まで来ていて、突撃体勢に入っていました。

比叡さん達が必死に機銃で敵機を撃っていますが、向こうの方が圧倒的に数が多く、

幾つもの敵機が防御陣形の内側に入ってきました。

「右舷、左舷から雷撃機多数侵入！直上より爆撃機多数！突撃して来ます！」

私達は必死に当たらないように回避していましたが、時が経つうちに敵機の爆弾や魚雷に当たる娘達が出始めた。

「キャアツ！くう……榛名、被弾しました！ですが、全力航行可能です！」

「あう!?む、叢雲、被弾……！速力低下!!」

比叡さんと榛名さんの機銃弾はすでに底をつき、私達は反撃出来ないまま、敵弾を受け続けました。

「翔鶴、被弾……旗艦損傷、中破。速力五分の三に低下しました。各艦、被害報告を」

「榛名、小破。全力航行可能」

「比叡、中破。速力五分の四に低下」

「羽黒、中破。速力五分の三に低下」

「叢雲、大破。舵損傷、速力五分の一に低下、右旋回不可能」

「瑞鳳です、小破しました。全力航行可能です」

やはり駆逐艦である叢雲さんの被害が一番大きいみたいで、フラフラしながらも必死に回避運動をしていたが、だんだん隊列から落後していった。

このまま行けば皆やられてしまいます……なら！

「旗艦として全艦に命令します！叢雲さんを回収し鎮守府に帰投して下さい！私が囮となり敵を引き付けます！」

「そ、そんな、駄目です！翔鶴さんを置いていけません!!」

瑞鳳さんは私の隣を併走するようにして抗議してきました。

「瑞鳳さん、このままでは全滅するのは目に見えています。幸いにも今は敵の攻撃が止んでいます。次の波が来る前に行って下さい。艦隊旗艦を榛名さんお願いします。皆さんを母港に連れて帰って下さい」

「翔鶴さん!!」

「……旗艦了解しました。比叡お姉様は羽黒さんに肩を貸して下さい。瑞鳳さん、貴女は叢雲ちゃんに肩を貸して下さい」

「榛名さん……!?!」

榛名さんは少し背の低い瑞鳳さんの目線に合わせてしゃがんでいました。

「瑞鳳さん、今すぐ戻り、翔鶴さんを助けにすぐ戻ってくるか、此処で全滅するかしかなかった道はありません。榛名は翔鶴さんを助けたいです。だから、早く行きましょ？翔鶴さんはこの位じゃ沈まないから……ですよね？」

「ふふふ、そうね。瑞鶴を残してまた先には行きたく無いもの」

榛名さんの問いに微笑んで答えると瑞鳳さんは目に浮かんでいた涙を拭い、私を見上

げて来ました。

「翔鶴さん！沈んだら怒りますからね!!」

「あら、なら怒られないようにしないといけないわね」

私の言葉に安心したのか、瑞鳳さんは微笑み、対照的に榛名さんが泣きそうな顔になっっていました。

「榛名さん、お願いしますね」

「……はい」

榛名さんの指示通り皆さんは母港の方に戻っていききました。

榛名さん達が遥か遠くに離れていったのを見てから空を見上げると、私を沈めるであろう敵機の群れがやって来ました。

「機関妖精さん、全力航行出来ますか？」

「（・ω・） b

「流石ですね。……機関最大！最大船速をもつて敵機を引き付けます！妖精さん、模擬弾でも良いから敵を撃ちまくって下さい」

「（・ω・）

妖精さんも私の考えが分かっていたのか、指示したら直ぐに使えない砲以外から模擬弾を撃ち出していた。

「もつとです…もつと私に狙いを定めて下さい！」

私の声に反応したように、上を飛んでいる敵機が我先にと私に群がってきました。

「(コレで良いわ…コレだけ引き寄せられるなら、あの子達の方には行かないわね…)
皆…後はお願いね」

全力航行の維持が不能になったのか、私の速度が極端に落ち、待つてましたと言わな
いばかりに爆弾を次々この身に受けてしまいました。

「……すみません、提督、帰還出来そうにありません。瑞鳳さん、ゴメンね……約束守
れそうに無いわ」

爆弾を抱え真っ直ぐ私に向かって来る爆撃機を見つめて目を閉じ最後の衝撃に身を
構えていたけれど、いつまで経ってもその衝撃が襲って来ず、目を開き上を見ると戦闘
機の烈風が、次々と敵雷爆機を落としていました。

「各艦！空母艦娘を中心に輪形陣！敵機を近付けるな！」

「了解！！」

男の人の声が聞こえ、其方を向くと、私に向かって落ちて来た爆弾を槍で弾き飛ばし
ている、戦艦の方がいて、私の後ろと両側には矢矧さん、青葉さん磯風さんが機銃を撃
ちながら私を中心に陣形を組んでくれていました。

「翔鶴、今回は必ず連れ帰るからね！」

「矢矧さん……ありがとうございます」

矢矧さんの言葉に思わず涙が溢れて来ました。

「感動の最中すまないが、撤退するぞ！青葉、空母さんに肩貸してやれ。烈風隊は引き続き艦隊に近付く機を落として、深追いは厳禁だからな」

青葉さんの肩を貸りながら前を征く彼の逞しい背中を見つめていました

「翔鶴さん、彼は私達ラバウル基地の演習艦隊旗艦の戦艦甲斐さんですよ」

ジツと彼を見ていたら青葉さんが教えてくれました。

「戦艦、甲斐さん……」

彼、甲斐さんは味方機に当てないように弾幕を張りながら空をキョロキョロと見ていた。

「……よし、深海棲艦機は撤退したな……対空戦闘止め、対空対潜警戒を厳となせ」

甲斐さんは一息を吐いて私に向き合ってきました。

「改めて挨拶をさせて貰います。ラバウル基地演習艦隊旗艦、大和型戦艦五番艦の甲斐です。一応男です」

甲斐さんを見つめながらブーツとしてましたが、すぐ気が付き挨拶を返しました。

「あ、わ、私はショートランド泊地演習艦隊旗艦の翔鶴型一番艦の翔鶴です。助けて頂きありがとうございます」

肩を借りたまま頭を下げてまた上げると甲斐さんは優しい表情で頷いてくれていて、思わず顔が熱くなりました。

「それでは、ショートランド泊地へ向かいましょう。貴女達の艦隊は俺達の艦隊二名が保護に入ってますので、ご安心を」

「重ね重ねありがとうございます。では、私が航路を案内します」

「お願いします。陣形変更、青葉、翔鶴さんを真ん中に三角陣形、前左右に矢矧、磯風。俺が最後尾に付く」

甲斐さんは新人さんの筈ですが、的確に指示を出していました。

コレで、ようやく戻れますね。

~~~~~ショートランド艦隊SideEnd~~~~~

翔鶴さんを無事保護し、ショートランド泊地へ向かっている間水上電探を起動させていると、後ろからだんだんと深海棲艦の艦隊、約二十四体が近付いてきていた。

「このままだと敵に補足されるな……打撃力のある俺が残ればなんとかなる……か？」矢矧少し良いか？」

「はい、何ででしょうか？」

矢矧に声を掛けると、滑るように海面を走り俺の横に付いた。

「深海棲艦が後ろから近付いてきてる。このままだと補足されるから……矢矧、お前

が艦隊の指揮を執れ」

「……甲斐さんは？」

「彼奴らを足止めする。」

「ならば私か磯風を僚艦に！」

「遠近中どれも出来る俺だけ残った方が良いんだ。僚艦を気にしながらはやり辛い。矢矧、天城さんに天山全機こっちに送ってもらってくれ。上の烈風隊も燃料ギリギリだと思いうから、ショートランドからも制空戦闘機を要請してくれ。……頼むぞ」

「……分かりました、御武運を……。翔鶴を送ったら直ぐに戻ります」

「ああ、早く行け」

「はい」

矢矧が隊列に戻るのを確認してから、徐々に速力を落とし征き足を止めた。

「さて、妖精さんキツイ戦いになるが、よろしく頼むぞ？」

「[[[[[[[[[[（・ω・）]]]]]]]]」

妖精さんも達は凛々しい顔で敬礼していて、直ぐに持ち場に戻っていった。

「さて……一對二十四のパーティータイムだな」

槍を肩に担ぎ、振り返ると肉眼で確認が出来る距離まで深海棲艦が近づいて来ていた。

「ようこそ、パーティー会場へ……いらっしやいませー!!」  
槍を構え敵に向かって走り出し、たった一人の艦隊戦の火蓋を切った。

## 第十三話 撤退戦（2）

「先ずはコイツをプレゼントだ!!」

戦闘開始直後、射程距離の長い五十一糎三連装砲を深海棲艦に向けた。

「主砲一番から四番、徹甲弾装填。照準、深海棲艦艦隊。主砲一斉射……撃てえっ!!!」  
穂先を深海棲艦に向けて叫ぶと、声よりも更に大きな爆音を立てながら砲口から砲弾が飛び出し、真っ直ぐ深海棲艦に飛んでいった。

「主砲次弾装填急げ! 烈風隊、制空戦闘開始! 制空権が確保でき次第ゼロカンは弾着観測を開始せよ! 機銃妖精さんは敵を近付けさせるな!」

早めの回避運動で左右に動きながら自身の妖精さんと、烈風隊の妖精さんに指示を出した。

烈風隊は編隊を組み深海棲艦機と空戦を開始し始め、ゼロカンは少し離れた所にいた。

「クソッ! 航空戦力が拮抗してるのか? 爆雷撃機が抜けて来やがる!」

ゼロカンが抜けて来る機を攻撃しているが、手が回らないのも居るみたいでそれは副砲、高角砲、機銃の妖精さん達が頑張って攻撃位置につけないようにしていた。

「主砲妖精さん、難しいけど空母を狙ってくれるか？」

「(・ω・) b

お願いすると、主砲妖精さんは電探の妖精さんと確認しながら主砲を動かして撃つていた。

しかし、動きながらだから中々当たらずにいた。

「チツ！中々当たらないな！もう少し近付くか？」

「？(。D) (」

小さく呟くと電探妖精さんが驚愕の表情を浮かべていた。

「冗談だ、つと……頭を抑えられるのは結構キツいな……」

たまに攻撃位置に付いた爆撃機から爆弾を落とされるが、細かい動きで何とか避けていった。

「チツ、ちよこまかと鬱陶しいな！」

上に気を取られ過ぎたのか、深海棲艦の距離をよく見ていなかった。

「(。D) (」

「は？何だよ!?!——ぐあつ?!」

電探妖精さんが焦ったように空を指差していて振り向こうとしたら、いきなり肩に衝撃と痛みが走り、その瞬間向こうに撃たれたのだと理解した。



「クソッ！向こうの射程に入ったのか!？」

文句を言ってる間にも俺の近くに敵弾が落ちて水柱が立っていた。

「烈風隊も今は劣勢か……」

チラリと上を見ると烈風隊は弾切れを起こしている機が多くなっているようで、敵機の攻撃を避けるような機動をしていた。

「烈風隊、天城さんに帰投せよ!そのままだと被害が大きくなるだけだ!帰投して補給が終わったらまた来てくれ!」

俺の無線の指示を聞いたのか、烈風隊はすぐに旋回して戻っていった。

「さて……制空権は向こうの物か、ゼロカン隊、お前達は戦闘空域を離脱、別命あるまで待機せよ!」

ゼロカン達も離脱していき、完全に制空権を取られてしまった。

「……………あの攻撃を受けても、兵装は無事か……………なら……………!高角砲、機銃の妖精さんは対空戦闘に集中してくれ。主砲、副砲妖精さんは敵艦を弾切れするまで撃ちまくってくれ。……………コレより、敵艦隊に突撃する!全砲門、撃ちまくれ!!」

槍を振り回して敵弾を弾きながら最大船速で敵艦隊に向かった。

やはりだが、近づくに連れて敵の攻撃が激しくなってきた。

「ぐおっ!?!捌ききれないなあ!!」

「((((;。D。)))」

戦艦級の大口径砲弾は捌いていったが、駆逐艦や軽巡級の小口径砲弾は捌ききれず、次々と身体に当たっていった。

当たった場所を確認するように、応急要因妖精さんがあちこち見て回っていた。

「Σ(。D。;≡;。D。)」

電探妖精さんが慌てた様子で俺の肩を叩いていた。

「何だ!?……はっ、マジかよ」

電探妖精さんが今戦っている艦隊の奥から戦艦級の深海棲艦が十隻と他多数が近付いてきてると教えてくれた。

「ふう、諦めた訳じゃないが、ヤバいかもな!」

近付いてきた戦艦ル級や、重巡り級には主砲をお見舞いして撃破し、軽巡や駆逐艦には副砲と高角砲の幾つかを使って撃破してやったが、倒してもまた敵が現れて精神的疲労を感じてきた。

「はあ……まだまだ居やがるな」

深海棲艦の攻撃が何故か止んだので、態勢を整える為少し距離を取った。

「………後ろの艦隊と合流する積もりか………各砲塔状況確認。………」

番、三番副砲残弾僅か、二、四、五番高角砲大破射撃不能………何時喰らったんだ?………

それに、燃料も四割切ったか」

自分の損害に軽く絶望を覚えていると、戦艦を前衛にした陣形で深海棲艦共が再び俺に向かつて動き出した。

「……第二ラウンド、スタートか……もう少し休ませて欲しかったが、仕方ねえか」  
槍を構え直し、砲弾の残量に気を遣い深海棲艦共に向かった。

アウトレンジからの攻撃を行っていたが、次第に距離を詰められていき、致命傷には至らないものの、戦艦の攻撃を受けてしまっていた。

「くっ！三番主砲大破、一番、四番副砲大破！射撃不能！二番副砲残弾無し！四番主砲故障、旋回不可能！やべえなあ……コレは」

今の俺の被害状況は中破で、二基の主砲と二基の副砲を潰され、服もあちこち焦げ落ちてしまっていた。

しかし、機関には直撃を受けておらず、最大船速は未だキープ出来ていた。

「ふっー！」

「ss@◇△○!?!」

後ろから襲ってきた軽巡級の奴を槍で刺すと、叫び声を上げて沈んでいった。

「はっ！楽しいねえ!!」

離れている場所にいる奴は残った砲で撃ち、近い奴は槍と腰に付いている刀で斬り捨てていった。

けど、補給も無しの大艦隊戦で、装備が限界を迎えてきていた。

重巡を刀で斬ったとき、刀身の半ばから折れ、代わりに槍で刺すが、穂先が裂けるように割れてしまった。

「ちっ……砲弾も残り僅か、刀も槍も折れた……覚悟決めねえとなあ！」

無理やり折れた刀で戦艦を斬り、ソイツを盾代わりにしながら艦隊から離れたが、色々無茶しすぎたのか燃料が切れて動けなくなってしまった。

「はあ……まあ、散るなら派手に、んで奴等も道連れだな」

ふと確認すると、俺の状況は大破状態でそれを分かっているのか、深海棲艦共もゆっくりと近付いてきた。

「／＼（。△。＊）」

電探妖精さんが嬉しそうに空を指差していて、釣られて見上げると、味方の航空機が大編隊を組んでやって来てくれた。

「はあ……遅えよ、だが、助かったな」

深海棲艦共は現れた航空機に慌てながらも対処していたが、空母が艦載機を放つ前に、爆撃機（彗星）に墜とされ、完全に制空権を失っていた。

「全艦突撃！戦艦甲斐を援護回収する！」

声が聞こえて振り向くとラバウルの艦隊とショートランドから来たと思う艦隊がやってきて俺を囲うような陣形を取ってくれた。

「すいません甲斐さん、遅れました」

「いや、大破状態で弾薬欠乏して燃料切れてるけど気にしなくて良いぞ」

「す、すいませんでした」

「ははは、冗談だ矢矧。助かったよ」

矢矧を弄りながら敵を見ると、航空攻撃で残っていた深海棲艦が全滅していた。

「……戦闘終了か」

「はい。殿、お疲れ様でした」

「おう。……つと」

終わったからか気が抜け海面に座り込んでしまった。

「甲斐さん!？」

「大丈夫だって。気が抜けただけだよ」

矢矧の手を借りて立ち上がるが、燃料切れの為、動くことが出来なかった。

「……矢矧、燃料無いか？動くことが出来ない」

「補給艦の方に来て貰いましたから、大丈夫です。速吸さん、此方をお願いします」

「はい！」

海面を滑るように、ジャージを着ている女の子……速吸が近付いてきた。

「こんにちは！航空機搭載給油艦、速吸です！」

「大和型戦艦五番艦甲斐だ。給油よろしく頼む」

「はい！お任せ下さい！」

速吸の艦装から出て来たパイプが俺の艦装に装着されて、補給が開始された。

「ねえ、貴男が甲斐さん？」

補給中に妖精さんを労っていたら、助けた翔鶴と同じ服を着ているツインテールの女の子が声を掛けてきた。

「そうだけど……君は？」

「翔鶴型航空母艦二番艦、妹の瑞鶴です。姉の翔鶴を助けてくれて有難う御座います！」

瑞鶴は立ったまま、頭を深く下げてきた。

「気にしなくて良いよ。俺も今助けてもらったからな」

何故か自然と頭を下げている瑞鶴の頭を撫でてあげていた。

「ねえ……何で頭撫でてるの？」

瑞鶴は顔を上げて、小さく首をかしげていた。

「……なんとなく？」

「……そう」

小さく呟く瑞鶴の頬がほんのりと赤いように見えたが、夕日に照らされたただけだろ  
う。

## 第十四話 ショートランド泊地へ

速吸からの補給が終わり、燃料の残量を確認したら四割しか出来ていなかった。

「すいませんー！甲斐さんが大きくてコレだけしか出来ませんでしたー！」

速吸は頭を下げ、謝ってきた。

「いや、燃費悪いのは姉譲りだから気にしなくて良い」

速吸の頭を軽く撫でてから機関を始動させた。

「それじゃあ、空母と甲斐さんを中心に輪形陣を取ってショートランドに帰還します。

微速前進」

指揮を執る瑞鶴の言葉に皆頷いてショートランドに向かって動き出した。

「矢矧……?」

「どうしたの?」

「いや、自力で航行出来るから……」

動き出すと、何故か矢矧に手を掴まれ引つ張られる様な格好になってしまっていた。

「大破しているんですから、無茶させれませんよ」

「いや、別に無茶は……何でもない」



反論しようとしたら、矢矧に睨まれてしまった。

周りの警戒をしながらも、俺はいろんな人からの質問や会話を楽しみながら、ショートランド泊地が見える所まで来ていた。

「矢矧、もう手を離しても良いぞ。これ以上は恥ずかしい」  
「分かりました」

手を離れた矢矧は俺の後ろに戻り浜風達と話をしていた。

ショートランド泊地に着き、陸に上がり艦装を解除すると、戦闘の疲れが一気に襲ってきた。

「ふう……風呂入って、寝たいな……」

肩を回しながら小さく呟やっていると、瑞鶴が近付いてきた。

「甲斐さん、他のラバウルの方達と提督さんの所に来て欲しいんだけど良い？」

「ん？ああ、分かった。おくい、話してるとこ悪いが、ラバウル艦隊集まってくれ〜」  
声を掛けると、名残惜しそうにだが皆集まってくれた。

「悪いな、ここの提督に挨拶しに征かないと駄目だからな」

「了解した。だが、個人的には甲斐さんには入渠してほしいのだがな……」

磯風の言葉に瑞鶴は少し申し訳なさそうな顔をしていた。

「私も、そうして貰いたいんだけど、入渠場は一杯なのよ」

「磯風、俺は大丈夫だつて。それに、女の子から先に入つて貰わねえと気が引ける。……女の子と混浴するのもアレだしな」

「むう……甲斐さんがそう言うなら……」

少し乱暴に磯風の頭を撫でて宥めてやりながら、瑞鶴の後に続いて鎮守府の中に入つた。

一応上半身の服が破けて何か卑猥な感じだと天城さんに言われた為、輸送船に積んでおいた羽織を着ている。

「提督さん、瑞鶴です。ラバウルの皆さんを連れて来たわよ」

『入つて頂戴』

ラバウルとは趣の違うシヨートランドの鎮守府の内装を見ていたら、いつの間にか執務室に着いていたみたいで瑞鶴が扉を開いていた。

「俺は最後に入る。天城さんから入つて下さい」

「分かりました」

天城さん、青葉、矢矧、磯風、浜風、俺の順番で入ると、興味深そうに俺を見ている提督服の女性と目つきが戦艦並の駆逐艦娘が居た。

「ラバウルより派遣されました、演習艦隊の旗艦を務めています、大和型戦艦五番艦甲斐、以下五名参りました。よろしくお願いします」

俺の挨拶に合わせて皆敬礼をしてくれた。

「ショートランド泊地司令官を務めています。杉咲莉奈（すぎさきかな）です。今回は翔鶴達を助けてくれて有難う！」

杉咲提督が頭を下げると、駆逐艦娘の子も頭を下げていた。

「……………」

いきなりの事でどうしたら良いか戸惑ってしまい天城さんを見ると、微笑みながら、小さく頷いてくれた。

「杉咲提督、私達は出来ることをしただけに過ぎません。ですが、お礼は有難く受け取らせて頂きます」

天城さんの言葉に杉咲提督は頭を上げて嬉しそうにして、二人で談笑をしていた。

二人の様子を眺めていたら、駆逐艦娘の子が近付いてきていた。

「初めまして、私はショートランド泊地で秘書艦を務めています、陽炎型二番艦の不知火です。」

「改めて、今回の演習艦隊旗艦の甲斐だ。陽炎型という事は、磯風と浜風の姉か」

「はい、今回は翔鶴さん達を助けて頂き有難う御座いました。甲斐さんが殿を務めて頂いた事は聞いています。無事でなによりでした」

「運が良かっただけさ。ショートランドの艦隊が速く来てくれたおかげで此処に居ら

れる。感謝する、有難う」

「いえ、借りで言えば此方の方が大きいので」

不知火と話していると、磯風と浜風が近付いてきて、姉妹仲良さそうに話をし始めたから、そつと離れて青葉と矢矧の方に向かった。

「甲斐さん大丈夫ですか？」

「ん？ああ、正直今すぐにでも寝たい」

「……杉咲提督に頼みましょうか？」

「まあ、そこまで切羽詰まってるから大丈夫だ。だが、風呂入って寝たい……」  
疲れがピークに来ているのか、目がしょぼしょぼしてきた。

「本当にお疲れのようですねえ」

「もうちよつと我慢して下さい。杉咲提督、甲斐さんに休んで貰いたいので、先にお部屋だけでも案内してくれませんか？」

「あ、ごめんなさい。不知火、甲斐さん達をお部屋に案内してあげて」

「了解しました。では、先に甲斐さんの部屋から案内しますね」

杉咲提督にお礼の敬礼をしてから不知火に着いていき執務室を出た。

~~~~~磯風Side~~~~~

「此処が甲斐さんの部屋になります。それで……言いづらいのですが、お部屋が三部

屋しか用意できませんでした」

「……ふむ、つまり誰かが甲斐さんと一緒に部屋になるという訳だな？ 姉上」

「そうよ、磯風。どうしますか？」

甲斐さんの意見も聞こうと思つて隣に居る甲斐さんを見たが、何時の間にか居なくなつていて、代わりに扉が少し開いていた。

「……？」

「磯風？ どうしたんですか？」

「いや、甲斐さんが居ないからもしかしてと思つてな」

「ホントですね、甲斐さん居ませんねえ」

扉を開けて中を見てみると、布団も敷かず羽織を被つて寝ていた。

「誰が甲斐さんと一緒になる？」

私の言葉に何故か皆顔を赤らめていた。

「……何故顔を赤くするんだ？」

「い、磯風さんは平気なんですか？」

「どういう事だ？」

青葉さんの言葉がよく分からず聞き返してしまつた。

「甲斐さんと一緒に部屋になることですよ」

「別に気にしないぞ？」

「一晚一緒に寝るだけでそこまで狼狽えることなど無いと思うのだが……戦場ならば、テントで雑魚寝も有り得るというのに。」

「なら、磯風が甲斐さんと、浜風と矢矧さんが同部屋、天城さんと青葉さんが同部屋と司令官に伝えておきますね」

「ああ、姉上よろしく頼む」

天城さん達は何か言いたそうな顔をしていたが、諦めたような顔をして、各々の部屋に入ってしまった。

「甲斐さん、風邪引くぞ。布団を敷くから起きてくれ」

私も部屋に入り、甲斐さんに布団を敷くために身体を揺すった。

「ん……わか……った……」

のっそりとだが甲斐さんは起きて座っていた。

「(寝惚けている甲斐さんは以外と可愛いのだな)」

布団を敷きながら、座りながら必死に眠気と戦っている甲斐さんを見て、微笑ましく思えた。

「ほら、敷けたぞ。入渠場が空いたら起こしてやるから、それまで寝ていると良い」

「ん、悪いな……」

ゆつくりと布団に入ると、直ぐに寢息が聞こえた。

「やはり、無理にでも残っていれば良かったかな……」

あの時、怖くないと言えば嘘になるし、甲斐さんに先に逃げろと言われたときは情けないがホツとしてしまった自分がいた。

「……まだ建造されて一週間も経っていない甲斐さんに心で負けるとはな……鍛錬が足りないな」

部屋にポットとかが置いてあったので、急須に茶葉とお湯を入れ甲斐さんのあどけなさの残る寝顔を見ながら、お茶を飲んでいた。

~~~~~磯風SideEnd~~~~~

## 第十五話 再会

『……………さん。……………か……さ……。甲斐さん！』

「ん……？ああ、磯風か……どうした？」

少し強めに身体を揺すられて目を覚ますと、磯風が俺の顔を覗き込んでいた。

珍しく今回はあの甲斐の場所に呼ばれずぐっすり眠れた……もしかして気を遣ってくれたか？

「いや甲斐さん、入渠場が空いたら起こすと言っただろう？」

「……………そうだったっけ？」

「寝惚けていたみたいだな？ともかく、入渠場が空いたから入って来たらどうだ？」

「そうだな……そうするよ」

欠伸を噛み殺しながら身体を伸ばし、着替えを持って部屋を出て入渠場に向かった。

部屋を出て五分もしない内に俺は迷っていた。

「……………何で館内歩いてたのに、俺は中庭に居るんだ……？」

中庭のベンチに座りどうしようか考えていると、出入り口の方から艦娘が二人歩いて



きた。

「なんや自分、そんなことで悩んどるんか？」

「わ、私にとつては重要な事だから！」

「ハイハイ、わかっとなるって……ん？」

二人のうち、関西弁の子……龍讓が俺に気付いたようで、もう一人の子になにやら話し掛けていた。

「久しぶりやな甲斐、えらい男前になったなあ」

「そうだな龍讓。そう言うお前はえらいちんちくりんになったな？」

「貴様ア!!言つてはいけない事を言いよつたなア!!」

からかうように言いながら頭をポンポンと叩いてやると、頭に怒りマークを浮かべて掴み掛かって来たが、頭をそのまま押さえながら、困惑な表情を浮かべているもう一人の子に顔を向けた。

「君は初めましてだな、ラバウルから来た大和型戦艦五番艦甲斐だ。今日明日とシヨートランドに世話になる」

「あ、軽母艦の瑞鳳です。私の方もよろしくお願いします。……あの、龍讓離さなくて良いんですか？」

瑞鳳の言葉に、チラつと龍讓を見ると女とは思えない表情をしながら、俺の顔面に向

け拳を繰り出してきていた。

「手え離せや〜！んで、ツラ貸せや甲斐い〜！！一発殴らせや〜！」

「……今離れたら殴られるから却下で」

「安心せえ！一発で終わらせたるわ！」

「……息の根を止める気満々じゃねえか」

「あ、あははは……」

瑞鳳は俺と龍讓の掛け合いを見て苦笑いをしていた。

「んで、何で自分大破のまま此処に居るん？」

龍讓を宥めるのに五分位かかり、三人並んでベンチに座った。

「演習の持ちよつと戦鬪になつてな。味方の撤退の時間稼ぎしたらこうなつた」

「……自分、確かこの間建造されたんやろ？阿呆ちやう？」

「ほつとけ。燃料弾薬空になつたが生きて帰つて来たんだよ」

「えつと、それなら速く入渠してきはどうですか？今は誰も入つてませんから」

「そうしたいのは山々なんだが、道がわからねえんだ。館内歩いてたのに何時の間に

か此処に居たし」

そう言つたら、何故か可哀想なのを見る目で龍讓に見られた。

「……んだよ、龍讓」

「何でもあらへん。はあ、なんか疲れたからウチ帰るわ。瑞鳳、甲斐を入渠場に案内したり」

「えっ!? わ、私一人で!」

「当たり前やん。それに……………やる?」

「うっ、うう…………」

龍護が瑞鳳に何か耳打ちすると、何を言ったか判らないが、瑞鳳の顔が一瞬で赤くなっていた。

「別に場所を教えなくてもくれるだけでも良いんだが…」

「そないな事したら、自分また迷うやろ?」

「……………」

ラバウルでも偶に迷ってしまうのを思い出して、龍護の言葉に反論できなかつた。

「いう訳で、瑞鳳後は頼むな」

「えっ!? ちよっ、龍護〜!」

「ほな、またな〜」

龍護は瑞鳳の肩を軽く叩いて再び館内に帰って行った。

「あー…んじや、頼むわ瑞鳳」

「あ、はい!」

瑞鳳が歩き出したからその後を追うように歩いた。

「あ、あの！今更ですが、翔鶴さんを助けて頂き有難う御座いました！」

館内に入り、しばらく歩いていたら、瑞鳳が突然振り返って頭を下げてきた。

「なるほど、瑞鳳も演習艦隊に居たんだな。……気にしないで良いよ、こうして無事生きているからな」

「はい、有難う御座います、春夜さん」

「ああ、どういたしまし——ん？今なんて？」

「えっ？……あつ！ご、ごめんなさい！名前を間違えるなんて！」

「……いや、気にしないで良いよ。沙耶香」

記憶にすっかり残っている、仲の良かった二人の女子の一人を思い出し、軽く頭を撫でてあげながら名を呼んでやると、瑞鳳……いや、沙耶香は驚いた表情を向けてきた。

「本当に……本当に、春夜さんですか……？」

「今は甲斐だがな。沙耶香の知ってる橘春夜だよ」

「……よかつた……つ……本当に、また会えました！」

感極まったのか、沙耶香は目に涙を浮かべ俺に抱き付いてきた。

「……まあ、こんなに速く会えるとは思わなかつたがな」

抱き付いて泣いている沙耶香の頭を優しく撫でて泣き止むまで待った。

「もう、落ち着いたか？」

十分近く経った頃、沙耶香は落ち着いたのかまだ目に涙を浮かべながらも離れた。

「……うん、ごめんなさい。それと、ありがとう、私を覚えてくれて」

「どういたしまして、こつちこそありがとな」

「うん、それじゃ入渠場に案内するね。あと、今から私は瑞鳳だから」

「ああ、わかったよ。瑞鳳」

瑞鳳と他愛ない話をしながら入渠場に連れていってもらった。

瑞鳳が中に誰も居ないか再確認して貰ってから中に入った。

高速修復材の使用を貰っていたが、それを直ぐ使わず、三十分位ゆっくり浸かってから修復材を使って直ぐ出た。

「はあ……さっぱりした……」

入渠場に居た妖精さんが服を綺麗にしてくれていたの、それに袖を通して入渠場を出て、今度は迷わず中庭に着いた。

「ふう……今は……大体〇五三〇（マルゴーサンマル）か、少し位なら、寝てもいいか……」

ベンチに座り、夕方になって過ごしやすい気候だったから、目を閉じると直ぐ眠気が襲ってきて、それに抗わずに眠りについた。

~~~~~瑞鳳Side~~~~~

春夜さん……いえ、甲斐さんが入渠している間に私は龍讓の所に行きました。

「お？どないしたんや？」

「あのね、甲斐さんにちゃんとお礼言えたよ！」

「おゝそら良かったな！んで、甲斐はどうしたん？」

「入渠してて、少しなら大丈夫だから龍讓に報告しに来たんだ！」

「ふくん、せやけど甲斐って修復材の使用許可貰ってへんかった？さつき不知火から

そう聞いたんやけど」

修復材の事が全く頭に置いてなかった。

「ど、どどどうしよう！龍讓！多分甲斐さんまた、迷うよ！」

「落ち着きいや、とりあえず入渠場に戻ったらどうや？」

「う、うん！それじゃ行ってくるね！」

龍讓にお礼を言つて甲斐さんがまだ入ってるのを願いながら入渠場に急いだ。

入渠場に着くと、使用札が裏返しになっていて、中には妖精さんしか居なかった。

「妖精さん!!」

「Σ(。D。;」

いきなり大きな声を出したからか、妖精さん達はビックリしたようにこつちを向きま
した。

「あ、ごめんなさい。あの、甲斐さん……ここに居た男の人って何処に行つたか分か
りますか?」

「(・ω・) ☞

妖精さんは入渠場から出て中庭の方を指差していた。

「ありがとう妖精さん!今度卵焼き作ってあげるね!」

「(*・▽・*)

妖精さんにお礼を言つて、卵焼きの約束をした。

私の卵焼きは何故か妖精さんや駆逐艦の子達に人気だからね……甘いのかな?

中庭に入ると甲斐さんがベンチに座っていました。

「甲斐さん、お部屋まで案内しますよ」

「……………」

「……あれ?」

後ろから近付いて話し掛けたけど、甲斐さんの反応がありません。

「……甲斐さん？」

正面に回つてみると、甲斐さんは目を閉じて寝息を立てて眠っていました。

「ラバウルの人達の為に歓迎会があるんですけどな……」

激しい戦闘をして疲れてるのか、近くで喋っているのにぐっすり眠っています。

「ふあ……私も眠くなっちゃった」

甲斐さんの隣に座り、空を眺めていたら、何時の間にか私は眠りに付いていました。

~~~~~瑞鳳SideEnd~~~~~



## 閑話 ラバウル鎮守府の年越し&amp;お正月

師走の月、三十一日――

年越し前のこの日、午前の業務が終わった我がラバウル鎮守府では年末の大掃除が行われていた――が……。

「こら、紀伊！サボってねえで掃除しやがれー！」

「ぎゃー!?バレたー！」

自分の部屋の掃除が終わわり、別の所に行こうとして大和姉と紀伊の部屋を軽く覗いてみると、掃除の途中で飽きたのかベッドで寝転がりながら漫画を読んでいる紀伊を見つ、頭をニギニギしてやった。

「次は武蔵姉呼ぶからな」

「うう、はい……分かりました……」

ベッド上で正座して居る紀伊の前で仁王立ちで怒ると素直に漫画を片付けて、掃除を再開したのを見て、紀伊の部屋から出た。

「つたく……紀伊ももうちよつと真面目にしてくれたら助かるんだがな……」

他の人達の掃除をしている様子を見ながら食堂に行くと、鳳翔さんと矢矧、浜風、天

津風が片付けと平行しておせち料理の準備をしていた。

「鳳翔さん、何か手伝うことありますか？」

「あ、甲斐さん。ありがとうございます、厨房は私と浜風さんで十分ですので、矢矧さん達と食堂の方の掃除をお願いしますね」

「分かりました。矢矧、天津風手伝うことあるか？」

鳳翔さんの方から離れ矢矧達の方に近付きながら話し掛けると、矢矧と天津風は嬉しそうな表情になっていた。

「では、天津風と柵の上を拭いて下さい」

「分かった。んじゃ……天津風よろしくな」

「え、ええ。よろしくね」

天津風と並び、柵を掃除していたが、となりの天津風を見ると背伸びをして、倒れてしまいそうな感じがしていた。

「天津風、足場かなんか持って来たらどうだ？」

「でも、皆が脚立とか持って行ってるし椅子に立つのも危ないから……」

どうりで背の低い駆逐艦組や軽巡組が脚立やら梯子を使っていたのが分かった。だけど、このままじゃ危ないよな……そうだ、響にもやったアレをしてあげよう！

「天津風、ちよつと良いか？」

「?、何かしら?」

「俺の前に立って、向こう向いて」

「(うう?)」

天津風は首を傾げながらも俺の言葉通り素直に向こうを向いてくれたから、そのまま天津風の脇の下に手を入れて持ち上げ、肩に乗せ肩車をしてやった。

「ほら、コレなら高い所も安全だろ?」

「そそそうだけと!は、恥ずかしいわよ!?!?////」

「まあまあ、高い所は任せるからよろしくな」

「ま、全く、仕方ないわね♪////」

仕方ないと言いなながらも、声が弾んでいるのは気のせいか?まあ、今はとりあえず掃除に専念しようかな。

俺の目線より少し低い所の拭き掃除を終わらせると、いきなり天津風の顔が目の前に現れた。

「甲斐さん、上は全部終わったわよ!」

身体を曲げて俺の顔を覗き込みながら、天津風はドヤ顔風な表情を見せてきた。

「おう、丁度こつちも終わったぞ。お疲れ様だな」

乗せるときとは逆の手順で肩から天津風を降ろしてやり、ご褒美の代わりになるか判らないが頭を撫でてやった。

「この位どうって事無いわよ。それよりも次のこと矢矧さんに聞いてきましょ？」

撫でている俺の手を掴み、クイッククイックと軽くひっぱって来たから、逆らわずに付いていった。

「矢矧、向こうは終わったぞ」

「有難う御座います。でも、もう全部終わってしまったてゝるんですよ。鳳翔さんが前から少しずつ片づけていたみたいで」

「なるほどな……今は鳳翔さんと浜風は何をしてるんだ？」

手持ち無沙汰になっていたので、近くにあった天津風の頭を撫でながら厨房にいる二人を見て聞いてみた。

「お二人は明日のおせち料理と年越し蕎麦の用意をしてるんです」

「なら、手伝いに行こうか？」

「私も手伝おうとしたのですが、二人で大丈夫だと……雷が後から来るみたいで」

「なるほどな、なら他の場所行ってくるわ」

「はい、天津風はもう少し付き合っ頂戴」

「分かったわ」

鳳翔さんと浜風に軽く頭を下げてから食堂を出て次何処に行くか考えながら歩いていると、向こうから青葉がカメラを持ってやって来た。

「青葉、サボりか？」

「失敬な！コレでも立派な広報活動中ですよ！」

「ふくん、鎮守府瓦版って奴か？」

「はい！その一般の方達向けの物です！甲斐さんも一枚！」

「却下、一般人向けなら、俺の写真は止めといた方が良いな」

俺に向けていたカメラのレンズの部分を手で覆うように隠した。

「え？どうしてです？」

「一般人の男達が多いだろ？」

「あく…理解しました」

「そう言うこつたんじゃ、取材はそこそこにしとけよ」

「分かってますよ！」

青葉の頭をポンと撫でて手伝いの要りそうなところに向かったが、皆優秀みたいで終わっているようだった。

「ふむ…どうするか」

「なにがだい？」

中庭のベンチに座って眩くと後ろから声をかけられると共に抱き付かれた。こんな事するのは限られるが、この声は……。

「いや、暇になつたなと思つてな。響は何のようだ？」

「私も同じだよ。コレでもどうだい？」

隣に座つてきて響がポケットから取り出したのはウオツカでご丁寧にコップも二つ取り出していた。だから何であの量がポケットn——（世の中には知って良いことと悪いことがある。後は分かるな？）——何だ今の？まあ良いか。

「取り敢えずそれを仕舞いなさい」

「美味しいよ？」

「関係ないから……」

「もう、我が儘だね甲斐さんは」

「ほう？」

「あ!？」

ポケットにウオツカを仕舞いながら響はしまったという表情をしていた。

「じゃあ甲斐さんまたよる——に!？」

逃げ出そうとした響の首根っこを掴んだ。

「逃がさないぞ?」

「えつと……うわあつ!」

響をそのまま掴み上げて肩車をしてやった。

「ちよ!?!やるときは許可を取るって!?!//」

「コレは仕返しだから」

「コレは、かなり恥ずかしいよ//」

チラツと硝子に映った響を見ると、帽子を深く被り、俺の頭で顔を見せないように張り付いてきていた。

「さて、鎮守府の見回りに行こうか」

響の狼狽えつぷりに悪戯心が沸き思わずニヤつきながら言ってみると、硝子に気付いた響が真つ赤な顔を上げた。

「甲斐さん私をからかっているね!?!ううん、からかっているでしょ!!」

「はっはっはっは……」

響の問いに答えることなく響の足をしっかりと掴み館内に入ってしまった。

「ちよつと!?!降ろしてつてばー!?!//」

中庭に 響の声がか こだました (季語無し)

弄りすぎて顔を真っ赤にしてフラフラしていた響を同じ部屋の電に任せて他の場所に行くことにした。

響をチラツツと見ると恨めしそうに俺を涙目で睨んできていたが、ドヤ顔をかえしてやった。

暫く歩いてると、後ろから、背中に何かが張り付いてきた。

「おにいちゃん、見つけた♪」

首を回し顔だけ向けてみると、ハルが笑顔で背中に掴まっていた。

「どうした？掃除は終わったのか？」

「うん、武蔵おねえちゃん、と信濃おねえちゃんに良いよって」

「そっか、なら一緒に回るか？」

「うん！」

ハルは背中から降りて自然に俺の手を握ってきた。

「行くか」

ハルの歩く速さに合わせて歩き出して先ず執務室に向かった。

『提督！掃除をサボっていたな!? 一時間前と変わっていないではないか!!』

『ごめんなさい〜!?!』



執務室の扉を開けようとしたが、中のやり取りが聞こえてきてそつと手を引いた。

「おにいちちゃん、どうしたの?」

「……いや、提督は忙しそうだから、また後で来ようか」

「……?うん」

ハルは執務室の方を気にしていたが、俺に付いてきてくれた。

『終わるまで休憩は無しだからな!! (´Д` )』

『そんなあゝ?!? (´ω` ; ; )』

二人の表情がよく分かるような内容を聞き流して別の所に向かった。

「みんな、ゆっくりしてるね」

ハルの言った通り周りの子達は掃除が終わっているようで、楽しそうにお喋りしながら掃除道具を片付けていた。

「そうだな」

「うん。……あつ!」

ハルは何かを思い出したかのように止まって声を上げた。

「どうしたんだ?」

「電ちゃんと、会う約束してた」

「俺は良いから、行つてきな」

「うん、またね」

ハルを見送つて外を見ると、もうすぐ日が沈む頃だった。

「ん……執務室……いや、食堂で鳳翔さん手伝うか」

軽く伸びをして、食堂に向かった。

—————

食堂に入ると、蕎麦の香りと出汁の香りが漂っていた。

矢矧と天津風はいなくて代わりに厨房に鳳翔さん、浜風、雷、蒼龍さんが居た。

「皆様方、何か手伝う事ありますか？力仕事しか出来ないけど」

「甲斐さん、ならコレを捨てて来てくれますか？」

蒼龍さんが反応して、厨房の端を見たからそつちを見ると、パンパンに膨れているゴミ袋が四つ置いてあった。

「了解、んじや行つてくる」

「ありがとね」

「ありがとね」

厨房に入りゴミ袋を四つ一気に持ち食堂の裏口から出て、ゴミ捨て場に向かった。

「お？甲斐さんじゃねえか」

ゴミ捨て場には先客の天龍がいた。

「よう、天龍もゴミ捨てか?」

「まあな、それより速く戻らねえと!」

「何かあるのか?」

「ガ〇使見ないといけないだろう!」(※このラバウル鎮守府には日本のテレビが映り  
ます)

「〇キ使ねえ……俺は紅白派だな」

「なんだろ……甲斐さんに合う気がする」

ゴミを捨てて館内に戻るまで天龍と話していたが、駆逐艦組とガキ〇を見る約束して  
いるらしく走って行った。

鳳翔さん達お手製の年越し蕎麦を皆で食べ、食事の時間が終わると皆思い思いの事  
やりに行った。

俺は鳳翔さんを手伝って洗い物をしてから、自分の部屋でテレビを見ながら一人で晩  
酌をしていた。

「今年ももう終わりか……濃い一年だったな」

一年を思い出しながら摘まみの唐揚げ(鳳翔さん手作り)を食べていると、部屋の扉  
が開き響が両手に酒瓶を持ってやって来た。



紀伊の頭を握りながら外を見ると、まだ薄暗かったが、紀伊のせいで眠気が完全に失せた。

「はあ……着替えるから部屋から出とけ」

「着付け手伝うよ？」

「着付け位一人で出来るわ」

「はあい」

紀伊が部屋を出たのを確認して寝間着の浴衣を脱ぎ白を基調とした着物を着てその上に気に入っている紺色の羽織を着て部屋を出ると、紀伊がまだ立っていた。

「おお〜♪甲斐似合ってるじゃん♪」

「ありがとよ。んで？大和姉とかは？」

「大和お姉ちゃんはまだ着替えてたよ。武蔵お姉ちゃんと信濃お姉ちゃんはもう起きて着替えてると思うよ？」

「そうか、ハル迎えに行ってくるかな……紀伊はどうする？」

「んー……食堂に行つとくよ。大和お姉ちゃんも行くって言ってたから」  
俺の部屋の前で紀伊と別れて武蔵姉と信濃姉とハルの部屋に向かった。

（コンコンコンツ）「武蔵姉、甲斐だけど入って大丈夫か？」

『甲斐か、良いぞ皆着物に着替えてるからな』

武蔵姉の了承を得て中に入ると、晴れ着に身を包んだ信濃姉と武蔵姉、そして、何時もの黒い服とトゲトゲした帽子を脱ぎ髪を纏め上げたハルが居た。

「ほう、似合っているじゃないか甲斐」

「武蔵姉も何時もとは違ってお淑やかに見えるな」

「ほう？」

「やべっ」

武蔵姉から離れて信濃姉に話しを振った。

「し、信濃姉とハルもよく似合ってるな」

「ふふふ、ありがとう甲斐。貴方も似合ってますよ」

「ありがとう、おにいちちゃん♪」

ハルは何時もと同じように俺のお腹に抱き付いてきた。

「甲斐よ、さっきの事忘れていないからな？」

俺の背後で武蔵姉に呟くように言われた。

「……ハイ」

「では、少し速いが食堂に行こうか」

「はい」「うん」「おう」

食堂まではハルと手を繋いで向かった。

食堂に入ると、テーブルに沢山のおせち料理が並んでいてチラツと端の方を見ると、浜風と雷がソファで重なるように眠っていた。

「武蔵姉、アレ」

「む……甲斐、その羽織貸してやれ」

「まあ、そうなるだろうな」

羽織を脱ぎ、二人に掛かるように被せてあげた。

「鳳翔さん、蒼龍さんお疲れさまでした」

「ふふ、ありがとうございます」

「ありがとうね」

浜風達の近くで座ってゆっくりしていた鳳翔さん達の近くに行った。

「寝なくて大丈夫なんですか？」

「ええ、私達は仮眠を取りましたから」

厨房の方を見てみると、大和姉と紀伊が洗い物をしていて、いつの間にか信濃姉が餅を焼いていた。

「武蔵姉は行かないのか？」

厨房の方を見ながら聞いてみると、「邪魔になるだろ」と言つて他の人が集まるまで五人で話していた。

食堂に皆が集まりだして来たので、浜風達を起こすことにした。

「浜風、雷起きろ。皆集まつて来たぞ」

二人の肩を軽く揺ると雷が先に目を覚ました。

「ふぁー、おはよう甲斐さん。起こしてくれてありがとう」

「どう致しまして。浜風、おきろ〜」

「んん……」

浜風はしづといようで、身動きしただけで起きなかつた。

「浜風ちゃんつて、寝起きが悪いらしいわよ?」

「そうか……なら」

ちよつとした悪戯をしようと浜風の耳元に口を寄せた。

「浜風、速く起きないと、キスするぜ?」

「……………えっ!?!／／／」

ピクツと動いたと思つたら、凄い勢いで浜風は起きた。

「ククク……………おはよう浜風」



「……お、おはよう、プツ、浜風ちゃん」

雷は笑いを堪えながら浜風に挨拶していた。

「お、おはようございます。さっき何か言いませんでしたか?」

「さあ?何か言ったか?雷」

「ふふ、し、知らない、わよ……ふふふ」

「何か言いましたね!?何を言っただんですか!」

「さあな?寝惚けていただけだろ。な、雷」

「甲斐さん、止めて、ふふ、笑いが……」

「何をしてるんだお前達は……」

後ろから声を掛けられて向いてみると、武蔵姉があきれたような顔をしていた。

「もう提督も来ているぞ。速く席に着け」

「了解」「わかった」

二人に掛けていた羽織を再び着て、席に座ると、俺達が最後だったみたいで、提督が話し始めた。

「皆さん明けましておめでとうございます」

『おめでとうございます!!』

「去年は新しい人が四人増え更に賑やかになりました。それに轟沈してしまっただ子も

表れずよかったです。今年も、皆さんが元気に、無事に過ごしていけるように祈つてます。話しはこれ位にして、乾杯をしましょうか」

提督の言葉に重巡以上の子はお猪口を、軽巡から下の子はジュースの入ったコップを  
持った。

「今年も良い年になりますように……乾杯!!」

『乾杯!!』

美味しいお酒とおせち料理を堪能し、少ししたら俺は軽巡と駆逐艦の子にお年玉を配っていった。

そして、笑顔に溢れる食堂を見渡していると、紀伊が近付いてきていた。

「どうしたの?」

「いや、今年も皆を護つてやろうと決めただけだ」

「そっか、じゃあ私もソレを目標にしよつと」

「適当だな?」

「良いんだよ!」

紀伊は俺の手を引っぱり皆の中に入っていった。

(この場所は絶対壊させない)

と心に誓つて――。

## 第十六話 平和な一時

「ん、ふあゝ……はあ、大分スッキリしたな……」

腕を伸ばして伸びをすると、膝に何かがポスンと乗ってきた。

「なんだ？」

膝を見ると、瑞鳳が俺の膝を枕にしてベンチの上で猫のように丸まりながら眠っていた。

「器用に寝てるな」

瑞鳳の淡い茶色の髪を優しく撫でてあげた。

「そういや、コイツもあの戦場に居たんだよな……怖かっただろうな……」

労る思いを乗せて撫でていると、後ろから誰かが近付いてきた。

「見つけたと思ったら、なんやええ雰囲気やんけ」

「龍譲か、どうしたんだ？」

近付いてきた龍譲は、俺の隣に座ってきて瑞鳳の寝顔を見ていた。

「いやな、自分らラバウルの人の為に歓迎会やるんやけど、甲斐の部屋に行ったら、磯風がまだ帰ってきとらん言うて探しとったんよ。」

「そうだったのか……なら、瑞鳳起こさないとな」

「せやな、気持ちよお寝とるから気が引けるんやけどなあ」

「確かにな」

プニプニと柔らかいほっぺたを突いてやると、くすぐったそうにしていた。

「瑞鳳、起きろ」

優しく肩を揺すつてみると、瑞鳳の目がうつすらと開いた。

「ん……あ、甲斐さん」

まだ寝惚けてるのかトロンとした目で俺を見上げて可愛い笑顔を向けてきた。

「これは起きたのか……？」

「いんや、まだ半分寝とるな」

苦笑いしながら龍譲が答えて瑞鳳の額を軽く叩いた。

「あうっ！うう……もう、何するのよ龍譲！」

瑞鳳は龍譲に顔だけ向けて頬を膨らませていた。

「怒るのはかまへんのやけどな、先ず真っ直ぐ前向いてみ？」

「ふえ？前？」

きよとんとした顔でこつちを向くと、俺と瑞鳳の視線が交差した。

「あ……れ？甲斐、さん？」

「おはよう瑞鳳」

「おはようございませす。……あれ？」

瑞鳳は何故かポムポムと俺の膝を撫でていて、膝枕していると分かった様でその瞬間顔を真っ赤にさせて、俺の膝からどいた。

「ご、ごめんなさい！膝を借りてみたいで！」

「気にしなくて良いよ、可愛い寝顔見れたからな。な、龍讓」

「せやなくあどけない可愛い寝顔やったで」

「か、かわっ!?!////」

俺と龍讓の言葉に瑞鳳は更に顔を赤くしていた。

「ほな食堂行こか、甲斐」

「そうだな」

「……え？ちよ、ちよつと待つてよ!?!」

フリーズしている瑞鳳を置いてベンチから立ち、龍讓と並んで食堂に向かおうとしたら、気を取り戻したのか瑞鳳が追ってきて、俺と龍讓の間に入り、腕を組んできた。

「非道いよ〜二人して置いていこうとするんなんて」

瑞鳳は頬をまた膨らませ俺と龍讓を交互に見ていた。

「悪い悪い」

「やっぱ瑞鳳はからかいがあるなあ」

「もう！龍譲お！」

龍譲の瑞鳳弄りを聞きながら、食堂に向かうと、既にラバウルの皆が来ていて思い思いの場所でショートランドの人達とお喋りしていた。

「甲斐さん、遅かったではないか」

俺に気付いた磯風が話し掛けて来たから磯風の方に近付いた。

「いや、入渠してから中庭のベンチで寝てたからな」

「なるほどな。大分疲れていたみたいだな？」

「まあな……まだ眠たいけど」

磯風と話してたら、巫女服の様な服を着た女の人が二人近付いてきた。

一人は見たことある子だった。

「甲斐さんですね、お久しぶりです。金剛型三番艦の榛名です」

「やっぱ榛名か。久しぶりだな、そっちの人は？服装からして榛名の姉妹だと思うが」

「私は金剛型戦艦二番艦の比叡です。翔鶴さんの危ない所を救って頂きありがとうございます  
ございました」

比叡のお礼の言葉と共に二人は頭を下げてきた。

「気にしなくて良いよ、俺達がやるべく事をした。ただそれだけだからな」

「ありがとうございます。では、甲斐さんの席に案内しますね」

榛名と比叡に着いていくと、そこには天城さんや翔鶴さん、瑞鶴も居た。

「あ、甲斐さん。遅かったじゃない」

「ちよつと寝てただけだ。間に合ったから良いだろう？それにさつき磯風にも言われたんだよ」

「そうだったの？」

「ああ。……で？ここに座ったら良いのか？」

天城さんと比叡の間の席が空いていて、確認すると天城さんが頷いてくれた。

「んじゃ、失礼して」

席に座ると、薄い緑色の髪を赤いリボンで一纏めになっている女の子が水を出してくれた。

「ありがとう、えーと……」

「給量艦の伊良湖です、よろしくお願いますね」

「こちらこそ、大和型戦艦の甲斐だ。よろしく」

「はい！」

伊良湖さんは挨拶を交わすと直ぐに調理場に戻って行った。

「甲斐さん」

水を飲んで軽く喉を潤していると、声を掛けられたので前を見ると翔鶴さんが座っていた。

「どうしました？翔鶴さん」

「改めてお礼を言おうと思いましたが、今回はありがとうございます。甲斐さんのおかげで再びこうして戻って来れました」

「あの時も言いましたが出来ることをしただけです。結局俺も助けて貰いましたからね」

「それでもですよ。それに、甲斐さんは目覚めて直ぐなのに、撃破数は十を超えています。コレだけでも凄いことなんですよ？」

余り褒められるに慣れておらず、思わず照れてしまい頬を掻いた。

「ふふふ、甲斐さんは照れ屋さんなんですネ？」

照れていたら天城さんにかからかわれた。

「天城さん……勘弁して下さい……」

「ふふふ♪」

天城さんは口元に手を当てて微笑みだけだった。

からかわれながらも話をしていたら手を叩く音が聞こえて食堂の中は静かになり、音



のした方を見ると杉咲提督が立っていた。

「待たせてごめんなさいね、漸く執務が終わったから来れたわ。さて、長い話は無しにして先ずはラバウル演習艦隊の皆さん。改めてお礼を言わせて貰うわね、私達の仲間を助けてくれて有難う。お礼代わりとは言いませんが今日の歓迎会では思う存分食べて飲んで下さいね」

杉咲提督の言葉と共に重巡以上の艦娘達にどこからともなく現れた妖精さんからお酒が配られ、他の人はジュースやお茶を持っていた。

「飲み物は届いたわね？それじゃあ、私達の演習艦隊とラバウル演習艦隊の無事の帰還を祝して……乾杯!!」

「!!!!!!!!!!!!!!乾杯!!!!!!」

## 第十七話 何事もハプニングは男が悪い

チユン……チユンチユン……

「んあ？……朝、か……」

窓の外から聞こえる小鳥の声で目を覚まして身体を起こすと、何故か部屋にラバウルの皆とシヨートランドの瑞鳳、翔鶴さん、瑞鶴、龍讓が寝ていた。

「……え？……何だ？この状況」

狭い部屋に皆重なるように寝ていて何人かは服が乱れて色々危ない感じになった。

「マジで昨日何が起きたんだ……？」

思い出してみても、俺は二時間ほどで部屋に戻りそのまま寝ただけで、こんな状況を引き起こす事はしていない……ハズだ。

「……よし、見なかつた事にするか」

静かに部屋を抜け出し昨日の中庭に向かった。

「早いからか此処は静かだねえ」

中庭は小鳥の鳴き声が響いているだけで他には何も音が聞こえず、偶に遠くから波の音が聞こえるくらいだった。

大破してしまった自分の身体の具合を確かめるようにゆっくりと身体を動かして違和感が無いか確認していると外に続く方から速吸が走ってきた。

「あ！甲斐さんおはよう御座います！身体はもう大丈夫ですか？」

「おはよう、速吸。ああ、身体はなんともないよ」

速吸は「それはよかったです」と微笑み、首に掛けていたタオルで汗を拭いていた。

「そうだ速吸、昨日の宴会なんだが乾杯した所までしか覚えて無いんだが、何が起きたんだ？」

「何も起きませんでしたよ。甲斐さんお酒を一口飲んだらうとうとしていて二時間位かなあ？そのあと磯風さんに連れられて部屋で寝てしまいましたから」

「そうなのか？」

「はい、甲斐さんが戦闘の疲れで眠ってしまったのでは？って戦闘に参加した皆さんが言っていましたよ」

「そうか、何か申し訳ないな」



磯風だけは固まっている俺と8人を見比べて首を傾げていた

「甲斐さん、着替え中だから部屋を出て居てくれないか？」

「……………ああ……………すまなかった」

『『『『『『『くあwse drft gyふじこ』』』』』』』

『ぬおお!!』

!?!?!?!?!?!

唯一平気そうだった磯風の言葉道理に部屋を出て扉を閉めると、一拍置いて鎮守府中に声にならないような悲鳴が響き渡った。

俺が部屋に背中を向けて正座をして五分ぐらい立つと扉が開く音が聞こえ正座のまま振り返ると、顔を真っ赤にした八人と平然としている磯風が居た。

「さて、甲斐さん?何か言い訳があれば聞きますよ?」

天城さんからの言葉に理不尽さを感じたが、ここでソレを言えば更に面倒な事になると思ひ言葉を飲み込み正直に言った。

「皆が居るのを忘れていました」

「……………はあ、私たちが甲斐さんの部屋で寝ていた所為もありますから強くは言えませんが、気を付けてくださいね?」

「分かった。次がないように気を付ける」

素直に謝ったからか、直ぐに正座を崩すのを許されて、部屋に入れてもらった。

「私達は先に食堂に行くから、甲斐さんも着替えて早く来るんだぞ」

「わかった」

皆が出て行ったのを確認してから汗で湿った肌着を変えて部屋を出た。

「あ、甲斐さん」

部屋を出ると、反対側にある窓の所に瑞鳳がいて、外を見ていたのかこっちに顔だけを向けてきた。

「どうした？皆と行ったんじゃないなかったのか？」

「そうだけど、甲斐さん食堂の場所覚えてる？」

「……………勘で行けるはずだ」

瑞鳳の言葉に顔を背けて言うのと溜息をつかれた。

「やっぱ戻ってきてきて正解だったわね。案内するから付いてきてね」

「はいはい、お願いしますよつと」

前を歩く瑞鳳の後を追いかけるように付いて行き、無事食堂までついた。

朝食を終え、食堂でお茶を飲んでゆっくりしていると杉咲提督がやってきた。

「今回演習って名目で貴方の力を図る予定だったのだけど、必要なかったわね？」

「そうですね、てことは演習は……？」

「今回は事が事だから中止ね。ラバウルの皆さんは帰還の指示が奏衣から届きましたよ」

「分かりました。皆に伝えておきます」

「お願いね」

「了解」

「——と、いう訳だから、昼過ぎにはこつち出る予定だからそのつもりで」

「なーんや、もう行つてまうんかいな？折角なかよーできた思ったのに」

「すまないな、また近い内に演習が行われるだろうからその時にまた合おうや」

「せやな、今生の別れつて訳やあらへんしな。今度はうち等がそつちお邪魔するかもしれへんな？」

「かもな」

「……………」

ラバウルの全員に通達を終えて龍驤と話していたら、龍驤の隣に座っていた瑞鳳が悲

しげな、寂しげな顔をして下を向いていた。

「なーに時化した顔してんだよ」

「ふわっ!?!」

俯いてる瑞鳳の頭に手を置き少し乱暴に撫でてやるとビックリしたような声を上げていた。

「さつきも言っただろ? 今生の別れでも無いって」

「うん……また、会えるよね?」

「当たり前だろ」

「ふにやっ!?!」

グリグリと乱暴に撫でながら笑ってやると、瑞鳳も釣られて笑顔になった。

「」「」「……………」（ニコニコ）」「」「」

視線を感じて回りを見たら、食堂に集まっている皆が温かい目で俺と瑞鳳を見ていた。

「なんだよ……」

「いえいえ、仲が良くて安心しましたよ?」

「……………／／／」（顔真っ赤）

瑞鳳は口をパクパクしながら耳まで顔を赤くしており、オーバーヒート寸前だった。



「さ、皆さん帰還の用意をしましょう。帰るときは甲斐さんを艦隊の真ん中に配置して帰りますよ」

「そうですね、甲斐さんは大破してましたし無理は禁物ですから」

俺が口を挟む前に天城さんと矢矧に編成を決定されてしまっていた。

「……ここで整備してもらったから平気なんだがなあ」

「駄目です」

「……はい」

謎の気迫に押されて頷くと食堂の皆が楽しげに笑っていた。

「甲斐さん、向こうに戻っても無理しないでくださいいね？」

「……わかってるって、お前も無理すんなよ」

「うん」

荷物といつても着替えくらいしか無いためすぐに支度ができた。

「甲斐さん私の用意は終わったぞ」

「分かった。それじゃ行くか磯風」

「うむ」

着替えの入ったカバンをもって港に行くと既にラバウル艦隊の皆が集結しており見送りの人達もいた。

「遅くなりました」

「いえ、大丈夫ですよ。甲斐さんと磯風は荷物を輸送船に預けてきてください」

「分かりました」

「了解した」

荷物を輸送船の妖精さんに預け天城さんの所に戻りショートランドの人達の方を向くと来てると思っていた瑞鳳の姿が無かった。

「瑞鳳は？」

比較的近くにあった龍驤に話しかけると苦笑いを浮かべていた。

「また会ったら我慢できそうにないって部屋に籠つとるわ」

「そっか、アイツにもよろしく言っといてくれ」

「任しとき、甲斐もあんな無理したらあかへんで？」

「分かっているって、流石に今回みたいなのはコリゴリだ。龍驤も無理すんなよ」

「最近就役した奴が生意気言いよって」

俺と龍驤が笑いあっていると他の皆は話し終わったのか離れ始めていた。

「時間やね、元気にな」

「おう。世話になったな」

龍驤と離れ艦隊に戻るとショートランドから翔鶴さんが一歩出てきた。

「今回は不運もあり演習できませんでした、皆様のおかげで私は助かることができました。お礼の代わりですが私の方から直掩隊を出させていただきます」

「ありがとうございます。私たちもお世話になりました。また会えることを楽しみにしておりますね」

「はい、ではまた」

「ええ。……艦隊抜錨！ラバウル基地に帰投します！」

「了解!!」